

呉西地区における伝統的工芸品に関する調査報告書
—富山型ニューツーリズムに向けた提案—

平成 30（2018）年 3 月

富山大学芸術文化学部

文化政策論ゼミ

目 次

はじめに	1
第1章 呉西地区の伝統的工芸品の現状	3
1-1 高岡漆器	3
1-2 高岡銅器	9
1-3 庄川挽物木地	15
1-4 越中和紙（五箇山）	21
1-5 井波彫刻	26
1-6 小括	33
第2章 呉西地区におけるニューツーリズムの取り組み	35
2-1 ニューツーリズムとは何か	35
2-2 呉西地区のニューツーリズム	40
2-2-1 能作の体験事例	40
2-2-2 はんぶんこの体験事例	44
2-2-3 高岡市工房見学の事例	46
2-3 小括	49
第3章 呉西地区の伝統的工芸品産地への具体的提案	51
3-1 高岡漆器産地	51
3-2 高岡銅器産地	54
3-3 庄川挽物木地産地	56
3-4 越中和紙産地	61
3-5 井波彫刻産地	66
第4章 富山型ニューツーリズムの方向性と展望	71
おわりに	75

参考文献	76
新聞記事	77
調査スケジュール	79
ヒアリング・調査一覧	80
(付録) 産地を元気にする 100 の提案	81

はじめに

全国の伝統的工芸品が衰退の危機にある。現代のライフスタイルに合わなくなった伝統的工芸品産地の製品は、販売額が激減することで生産体制が崩れはじめ、後継者も確保できず、技術伝承も困難となり衰退が進行し、その影響は原材料や道具の生産に及ぶなど、負のスパイラルを生んでいる。

富山県の伝統産業も同様である。平成29（2017）年10月現在、国が指定する伝統的工芸品は5品目（高岡銅器、高岡漆器、井波彫刻、越中和紙、庄川挽物木地）存在するが¹、その生産額はいずれもピーク時の3分の1以下に減少するとともに、従事者数も激減している。

これら富山県の伝統的工芸品産地の実態は、統計的なデータが一部存在するものの、産地がどのような現状で、関係者がどのように感じ、具体的にどのような行動をしているのかよくわかっていない。そこで今回、富山大学芸術文化学部文化政策論ゼミでは、五つの産地に関するデータの整理、さらに直接関係者にヒアリングを行うことで、現状の把握と課題の整理を試みている。そして単なる実態調査にとどまらず、課題解決の新しい展開として「ニューツーリズム（体験を含めた産業観光など）」に着目し、「学生目線の課題解決策の具体的提案」を行うとともに、富山型ニューツーリズムの方向性を構想している。

第1章では、五つの産地の実態をまとめた。生産額や従事者数の推移、生産工程や流通構造、体験や工房見学、近年の新たな取り組みについて言及している。

第2章では、呉西地区のニューツーリズムの現状をまとめた。産地再生として注目されているニューツーリズムは、本報告書でも課題解決の重要な手法と位置付けている。その取り組みについて言及している。

第3章では、五つの産地のSWOT分析をそれぞれ行い、産地の強みと弱み、機会と脅威から課題の抽出を試みた。その明らかになった課題の解決策を、学生目線で提案をしている。

第4章では、第1章から3章の調査から得られた知見から「富山型ニューツーリズム」の方向性について整理した。その結果、①「くつろぎ - relaxation -」、②「学び - education -」、③「連携 - network -」の三つの方向性を見出した。

さらに第3章の課題解決策の具体的提案として取り上げなかったが、アイデア段階のものを（付録）に列挙した。平凡なもの、すでに実施しているものもあるが、検討の過程を理解いただくため、また今後の事業のヒントにもなると考えて掲載した。

本報告書が、呉西地区伝統的工芸品産地の振興の何らかの示唆を与えることを期待する。

¹ 平成28（2018）年11月に福岡の菅笠が認定され6品目となっている。

第1章 呉西地区の伝統的工芸品の現状

1-1 高岡漆器

1-1-1 歴史的経緯

高岡漆器は、江戸時代の初めに加賀藩の藩主前田利長が、現在の富山県高岡市に高岡城を築いたとき、武具や箆筒、膳等日常生活品を作らせたのが始まりである。

「勇助塗」「彫刻塗」「青貝塗」という三つの伝統的な技法があり、うるみ色の地に玉石を貼り、鏝絵（さびえ）を描く「勇助塗（ゆうすけぬり）」、多彩な色漆を使って立体感を出していく「彫刻塗」、あわびや夜光貝等、虹のような輝きをもった貝殻を使って、山水や花鳥等を表現する「青貝塗」がある。江戸時代中期の明和年間（1764～1772）年に活躍した辻丹甫（つじたんぼ）の技法を元祖として「彫刻塗」が考案され、辻丹甫の作品は高岡御車山祭で練り歩く高岡御車山（みくるまやま）にも使われている。その後も、19世紀前半に板屋小右衛門らの名工が出て「彫刻塗」が盛んになる。また、江戸時代末期の嘉永3（1850）年には、石井勇助の中国・明代の漆器研究により「勇助塗」が創始され、明治時代に盛んになった²。これらの技術は歴代の名工によって伝えられ、多くの名作が作られるとともに、国の重要有形無形民俗文化財の高岡御車山に凝縮されており、高岡の文化として今日に継承されている。昭和50（1975）年9月には伝統的工芸品として国の産地指定を受けている。

高岡銅器同様、工程別の分業体制が確立されており、事業所規模は小さく、職人集団的色彩が強いことも大きな特徴である³。

1-1-2 生産額（販売額）、従事者数の推移

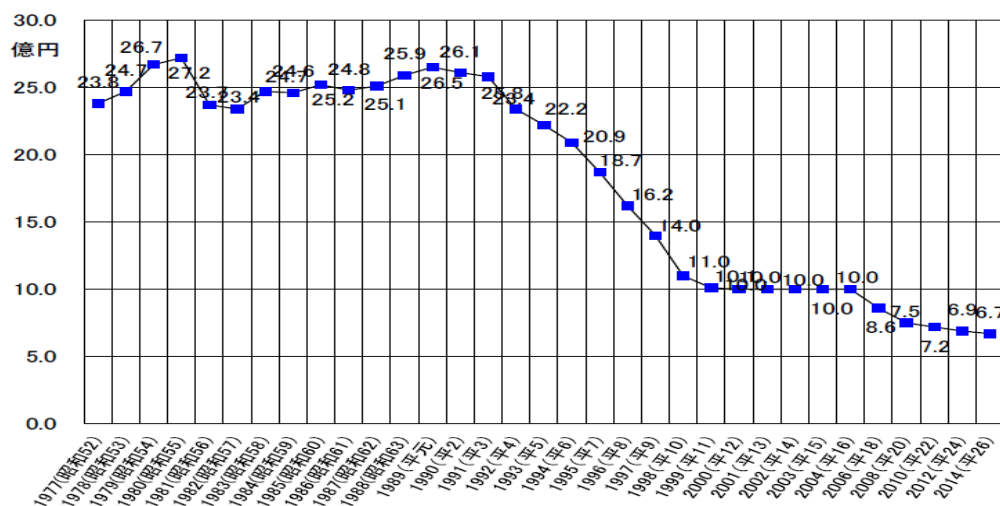
表1から読み取れるように、企業数・従事者数はともに減少し続けている。また、昭和55（1980）年頃の約24億1,500万円の漆器の年間販売額は、平成23（2012）年には6億9,000万円にまで減少している（図1）。平成26（2014）年の高岡漆器製造業従事者47名の年齢構成は、従事者の半数以上を60代以上の年齢が占めていることがわかる（図2）。

² 伝統工芸高岡漆器協同組合 HP「高岡 漆物語」より（<http://shikki.ec-net.jp/main.html>）

³ 高岡市「平成26年度版 高岡特産産業のうごき」

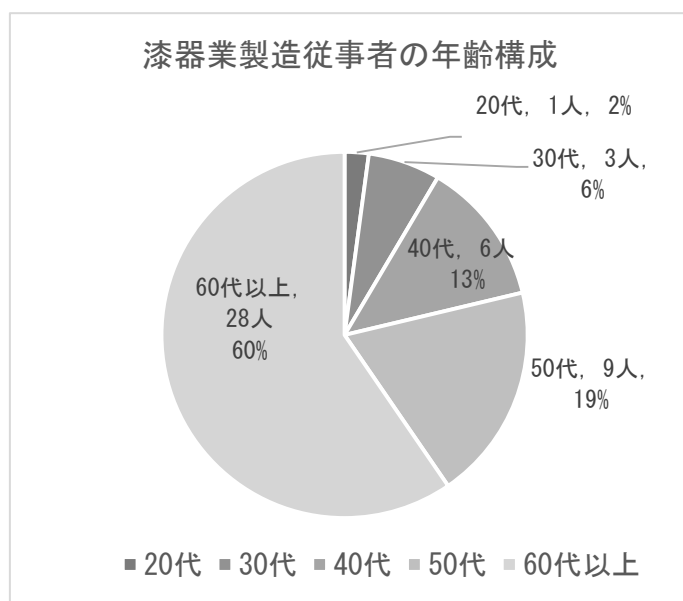
表1 高岡漆器企業総数・従事者数・生産額の推移

	企業総数	従事者総数	生産額
平成13(2001)年	92	227人	1,003百万円
平成17(2005)年	75	200人	970百万円
平成24(2012)年	36	126人	122百万円
平成26(2014)年	32	119人	124百万円



高岡市「平成26年度版 高岡特産産業のうごき」より

図1 漆器販売額の推移



高岡市「平成26年度版 高岡特産産業のうごき」より

図2 漆器の製造業従事者(47名)の年齢構成(平成26年度版)

1-1-3 生産工程・原材料など

高岡漆器の現材料は、木地にはケヤキ、トチノキ、カツラなどが使用される。塗りには漆、加飾技法である青貝塗にはあわびや夜光貝などの貝殻を使用する。彫刻塗では色漆による彩色技法・皆朱塗りによる陰影づけ、勇助塗では錆絵や箔絵を描いた上に青貝や玉石を施す総合技法が使用されている。近年は漆の価格高騰により、中国産のものや樹脂などの塗料を代わりに使うことが多い。

生産工程は以下のとおりである。

1. 木地工程

高岡漆器には、ケヤキ、トチノキ、カツラなどの木がよく使われており、十分に乾燥させた木材を削り加工し、木地を作る。高岡漆器は、主に以下の4種類の木地で製作される。

- くり木地：木材をノミで削ったり彫ったりして作成した木地
- 挽物木地（ひきものきじ）：木材をろくろにかけ削って作成した木地
- 曲物木地（まげものきじ）：薄くした板を曲げて貼り合わせ輪状にした木地
- 指物木地（さしものきじ）：複数の板を組み合わせて作成した木地

2. 下地工程（地付け・中塗り）

木地の傷を補修して表面をなめらかにし、壊れやすい部分に布を貼って補強する。布を貼って補強することを「布着せ」という。その後、貼りつけた布目が埋まるように、目止めの粉をムラなく均一に塗る。ここまでの工程を地付けという。次に目止め処理が行われたところに漆を塗り、漆が乾いたら表面を研いでなめらかにする。

3. 青貝工程（図案作成・青貝付け・毛彫り）

漆器の図面を作成し、図案を貝に移して切り抜く貝裁ちの作業を行う。直線的な部分は刃物で裁ち切り、小さなものは彫刻刀やノミで突き切り、鳥や動物など曲線の部分は針を使って切り抜く。特に、この「針抜き」作業には熟練の技が必要とされる。次に図案を木

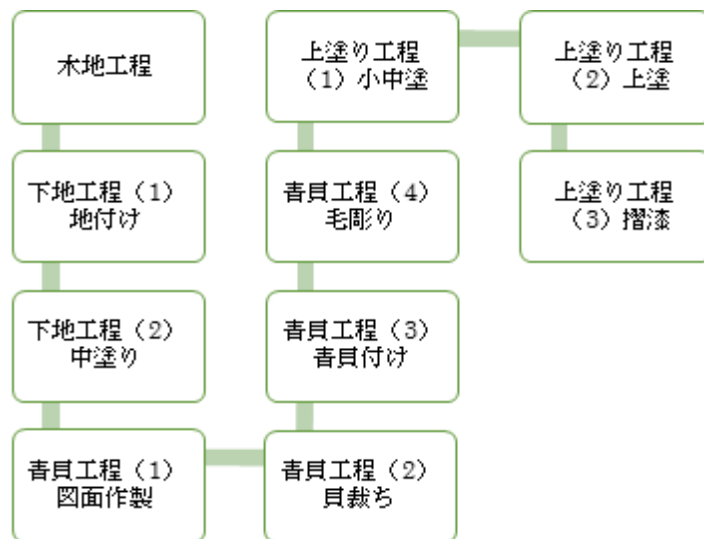


図3 高岡漆器の作業工程

地に写し、青貝を貼りつけるところに接着剤となる漆を薄く塗る。塗った漆の上に切り抜いた青貝を載せて貼り付けていく工程を青貝付けという。青貝を貼りつけた漆が十分乾いてから、人物の顔や花の芯などの細部を極細の針で描いていく毛彫り工程を行い、青貝工程は終了する。

4. 上塗工程

青貝を貼り付けた木地全体に漆を塗り、漆が乾いてからノミなどで青貝の部分の漆をはぎ取る小中塗（こなかぬり）の工程を行う。次に全体に上塗りをを行い、漆が乾いてから、全体を研磨用の静岡炭で磨き、次に呂色炭（ろいろずみ）で磨く。最後に、砥の粉（このこ）を菜種油で練ったものを使って全体を磨き上げる。生漆（きうるし）をごく薄くすりこむように塗り、漆が乾いてから、艶を出すために菜種油に角粉（つのこ）を混ぜたものを使って手で磨き、生漆を塗り乾いてから磨く作業を3回～4回繰り返す摺漆（すりうるし）の工程を行い完成させる⁴。

1-1-4 工房見学と体験メニュー

高岡漆器の体験一覧は表2のとおりである。また筆者が体験・ヒアリングを行った2つの工房について詳細に論じる。

表2 高岡漆器体験メニュー一覧

体験施設	制作物	価格	所要時間
(有)武蔵川工房	螺鈿細工体験 (箸・ペンダント・ブローチ等)	3,780円～	1～2時間
(株)HANBUNKO	螺鈿細工体験	4,500円	2時間～
漆器くにもと	螺鈿細工体験 箸	2,500円	1～2時間
	アクセサリー 螺鈿ネイル（一本）	1,500円	15分～
(公財)高岡地場 産業センター	螺鈿細工・蒔絵体験 ペンダント	2,800円	2時間
	ミニパネル コーヒーカップ 湯呑	3,000円	

各ホームページから著者作成

①武蔵川工房

箸、ペンダント、ブローチなどに螺鈿細工を施す体験を主に行っている。所要時間は1時間～2時間ほどで、料金は箸で3,780円、その他のメニューで4,860円ほどである。体

⁴ 「KOGEI JAPAN」 (https://kogeijapan.com/locale/ja_JP/takaokashikki/#_FEATURES)

験が開催される日時などは不定期で、体験希望者は工房へ連絡を取る必要があるが、ネット予約も受け付けている。これまでは螺鈿細工を施したものに仕上げを施して後日配送していたが、現在は仕上げに時間のかからない塗料を使用して仕上げを行っているため、当日の持ち帰りが可能であり、外国人観光客や遠方からの観光客も体験しやすくなった。これまで体験に参加する客層は中高年が多く、とりわけ女性が多かった。しかし、じゃらんなどでネット予約サービスを始めたことによって、カップルなど若者の体験者も増えた。会社の研修などで大人数の参加もまれにあり、旅行シーズンや年末に参加者が多い⁵。

②漆器くにもと

螺鈿ネイル体験やアクセサリ、箸に螺鈿細工を施す体験を行っている。毎月第一日曜日に体験が行われ、予約も可能だが当日の参加も可能である。アクセサリや箸は体験者が図面を自分で考え、貝を貼り付けるところまでを行い、仕上げは職人が行う。螺鈿ネイルは体験者が自分でデザインを選び、ネイリストに施してもらい形をとる。アクセサリ、箸の螺鈿細工体験の所要時間は1時間～2時間、どちらも料金は2,500円で当日持ち帰りが可能である。螺鈿ネイルは指一本につき1,500円、所要時間は15分ほどである。

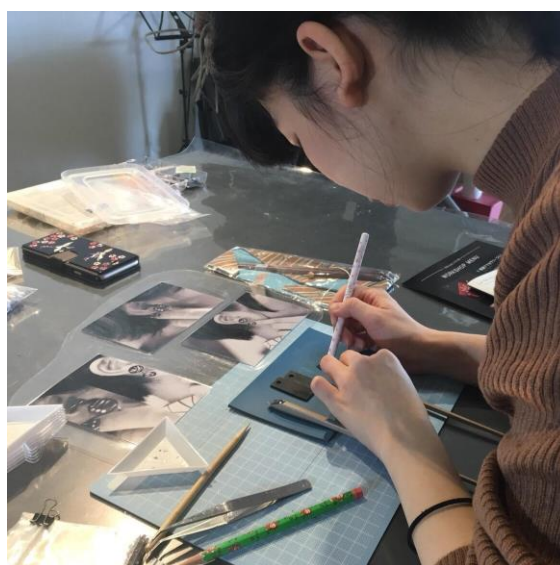


写真1 漆器くにもとでの螺鈿細工体験の様子

る。また、高岡市で開催されるクラフト市場街などのイベント時にも体験を行っている⁶。

実際に漆器くにもとでの螺鈿細工体験をした際、図面を自分で考えるという作業や貼り付ける貝を一枚一枚選ぶという作業を行ったことで大変満足度の高い体験をすることができた。講師の方と会話をする事でより高岡漆器に対する理解が深まり、親しみを持つことができたが、人手不足のため、そのように満足度の高い体験を行うためにはあまり多くの人数を受け入れることができないという現状が見えた。

これら上記の体験事業はほとんどボランティアのようなもので、利益はあまり考えていないということがどちらの事業所でも共通する考えであった。高岡漆器にかかる手間や技術を知ってもらい、産地に興味を示してもらうことでいずれは販売につながれば、と考えてのことである。伝統工芸を活用した産業観光に興味を持つ生産者はいるが、産業観光という分野で利益につながるほどのシステムを構築できずにいるという現状である。

⁵ 2018/1/29 有限会社武蔵川工房（武蔵川剛嗣氏）へのヒアリングによる

⁶ 2018/2/4 漆器くにもと（國本耕太郎氏・折橋治樹氏）へのヒアリングより

1-1-5 近年の取り組み

上記のようにそれぞれの工房で体験メニューが行われているほか、高岡市で毎年秋ごろに開催される「観る」「買う」「体験する」「食べる」の要素を取り入れた「高岡クラフト市場街」などのイベントや展示会、工房見学などの取り組みを行う生産者も多い。このような高岡の魅力をPRしようとする動きのほか、新商品開発や販路開拓に向けて市が支援制度を設けるといった試みもされている。平成29（2017）年度に地域中核企業創出・支援事業として「伝統産業を中心とした体験型産業観光プラットフォーム構築支援事業」を行うなど、高岡独自の産業観光のかたちを探るためさまざまな取り組みを民間・行政ともに行っているが、成果を上げられるようになるまでは時間を有すると考えられる⁷。

1-1-6 課題

産地全体の課題として、従事者数の減少や生産額の減少などのほか、現代のライフスタイルに適合した継続的に売れる商品の開発不足や、流通・販売形態の不備、人材育成のためのシステム開発の遅れなどが挙げられる。これらの課題を解消するためには、継続的に売れる商品や提供する側に利益のあるサービスの開発が必要である。

⁷ 2018/2/1 高岡市役所産業振興部産業企画課（高橋氏・杉坂氏・秋元氏）へのヒアリングより

1-2 高岡銅器

1-2-1 歴史的経緯

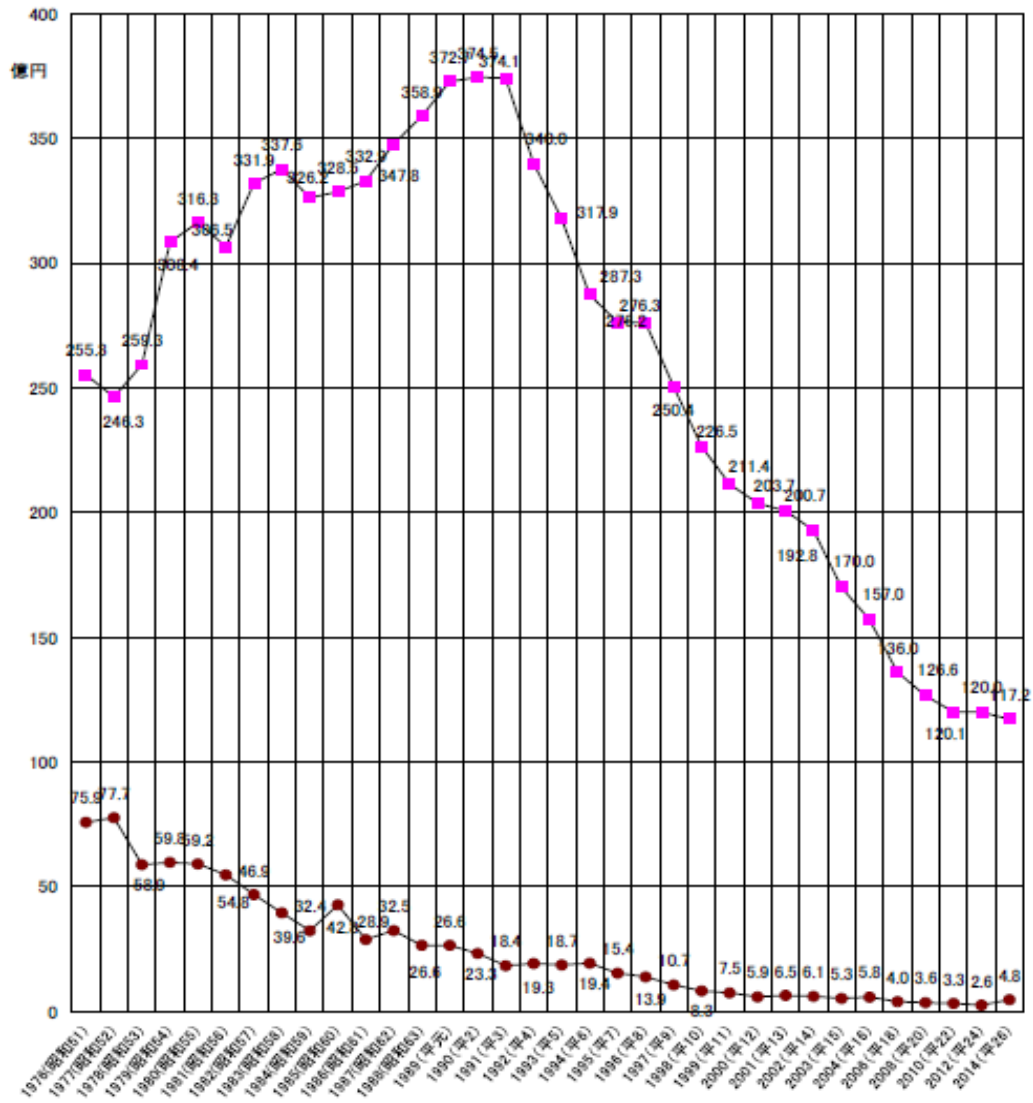
高岡銅器は、慶長 16(1611)年に加賀藩二代藩主前田利長公が高岡のまちの産業振興策のひとつとして、現在の高岡市金屋町に鋳物工場を開設したことに始まる。当時は鍋・釜・農機具などの鉄鋳物が主体であったが、幕末から銅器美術工芸品へと発展し、明治時代にパリ万国博覧会に展示されるなど、世界的に知られることとなった。戦時中、軍事使用のため金属が手に入らず、壊滅的な打撃を受けたものの、戦後、先人たちの努力により、急速に復興した。さらに新製法の導入により大量生産体制が確立され、昭和 50(1975)年 2 月には伝統的工芸品として国の第一次産地指定を受けている。

産地の特徴として、製造・加工部門では工程別の分業体制が確立している。事業所規模は小さく、職人集团的色彩が強いことや、集積度合いが全国の産地に比べかなり高いことなどが挙げられる。製造業者は作ることに専念し、新商品開発や販売機能はほとんど産地問屋が担うという分業体制が採られてきたが、近年、産地問屋からの発注が減少したこともあり、独自に国内外に販路開拓を行う製造業者が増えてきている⁸。

1-2-2 生産額（販売先）、従事者数の推移

高岡銅器は日本国内の銅器の生産額の 90%を占めているが、平成 2(1990)年の 374.5 億円をピークに、平成 24(2012)年の生産額には 120 億円まで減少し、従事者の高齢化が進み従事者数も減少している。品種別では神仏具が現在でも多くを占めるが、減少傾向にある。しかし、株式会社能作、株式会社二上、有限会社モメンタムファクトリー・Orii などオリジナル商品を開発している製造業者の活躍もあり、ここ最近の生産額は横ばいになっている⁹。

⁸高岡市産業振興部産業企画課「特産産業の動き 平成 26 年度版」
⁹2018/02/09 高岡市デザイン工芸センター日野利氏ヒアリングより



出典：高岡市産業振興部産業企画課「特産産業の動き 平成26年度版」

図4 銅・鉄器販売額の推移

表 3 事業所数と従事者数

○問屋

	2014 (H26)	2012 (H24)	2010 (H22)	1990 (H2)	1985 (S60)	前回比 (%)
事業所数(社)	61	68	77	125	135	89.7
従事者数(人)	555	595	633	1,400	1,599	93.3

(46) (47) (50) ※()…アンケート回答社数

○鋳造

	2014 (H26)	2012 (H24)	2010 (H22)	1990 (H2)	1985 (S60)	前回比 (%)
事業所数(社)	67	71	79	151	164	94.4
従事者数(人)	617	615	624	1,573	1,750	100.3

(40) (49) (53) ※()…アンケート回答社数

○溶接

	2014 (H26)	2012 (H24)	2010 (H22)	1990 (H2)	1985 (S60)	前回比 (%)
事業所数(社)	4	4	4	10	12	100.0
従事者数(人)	4	7	7	21	28	57.1

○研磨

	2014 (H26)	2012 (H24)	2010 (H22)	1990 (H2)	1985 (S60)	前回比 (%)
事業所数(社)	17	21	24	49	49	81.0
従事者数(人)	33	39	42	97	91	84.6

○彫金

	2014 (H26)	2012 (H24)	2010 (H22)	1990 (H2)	1985 (S60)	前回比 (%)
事業所数(社)	18	18	22	39	45	100.0
従事者数(人)	23	22	42	97	110	104.5

○着色

	2014 (H26)	2012 (H24)	2010 (H22)	1990 (H2)	1985 (S60)	前回比 (%)
事業所数(社)	36	44	45	69	76	81.8
従事者数(人)	107	115	122	367	410	93.0

○仕上げ

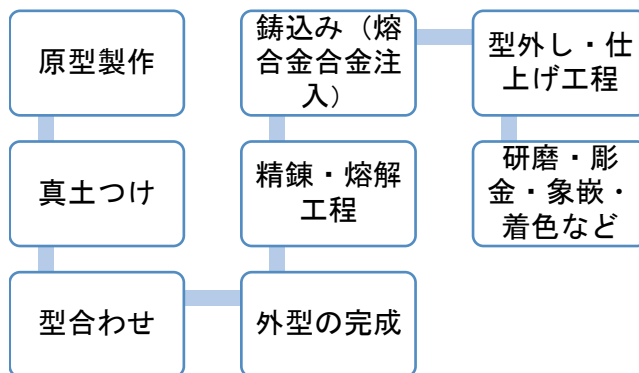
	2014 (H26)	2012 (H24)	2010 (H22)	1990 (H2)	1985 (S60)	前回比 (%)
事業所数(社)	9	11	12	18	22	81.8
従事者数(人)	15	19	20	46	49	78.9

高岡市産業振興部産業企画課「高岡特産産業のうごき 平成 26 年度」より

1-2-3 生産工程・原材料など

生産工程は、図5のとおりである。

高岡銅器は、銅合金による鑄造技術から作られ、原型づくり、鑄造、仕上げ加工、着色という工程を踏まえて製造される。鑄造は、溶かした金属をあらかじめ作っておいた原型に流し込み、目的の形にする金属加工法である。数千年前に生まれた鑄造の基本技術は今も変わっていないが、いくつものバリエーションがあり、高岡銅器では主に双型鑄造、焼型鑄造、蠟型鑄造、生型鑄造の4つの技法を用いる¹⁰。



「KOUGEI JAPAN」より
(https://kogeijapan.com/locale/ja_JP/takaokadoki/)

図5 高岡銅器の生産工程

表4 主な鑄造技術

双型鑄造法	もっとも古い技術で、円筒型や円錐型の火鉢、茶釜、梵鐘などの製作に用いられる。原型の外型は、左右対称の断面を写しとった板を回転させて作り、次に肉厚を出すために、一回り小さな中子型を作る。この2つを組み合わせることができる隙間に、溶かした金属を流し込む。
焼型鑄造法	小さくて複雑な置物から大きな銅像まで製作する技法である。粘土と和紙の繊維を調合した真土（まね）という鑄型を作り、約900℃で焼いた後、約400℃に冷ましてから、溶かした金属を流し込む。
蠟型鑄造法	もっとも精度の高い技法である。蜜蠟（ミツバチの巣から抽出）や木蠟（ハゼの実から抽出）に松脂を煮合わせたもので原型を作り、土に包んで高温で焼くと、熱によって原型の蠟が溶け、隙間が生まれる。ここに溶かした金属を流し込む。
生型鑄造法	高岡銅器を発展させた主力の技法である。木製または金属製の上下枠に、製品と同じ形の種型を入れ、砂を入れて押し固め、上下枠をはずし、原型を取り出すと、砂の鑄型ができる。これに溶かした金属を流し込む。

高岡銅器協同組合ホームページより (<http://www.doukikumiai.com/skill/index.html>)

¹⁰ 高岡銅器協同組合ホームページより (<http://www.doukikumiai.com/skill/index.html>)

1-2-4 工房見学と体験メニュー

工房見学は、株式会社能作で平日に行われている。また、高岡市伝統産業青年会主催の若手職人が案内する工場を見学するクラブツーリズムや高岡市銅器団地協同組合主催のオープンファクトリーが開催されている。また、高岡市銅器団地では、大手旅行会社と旅行を企画し客の要望を踏まえた工場見学を行っている。

体験を行っている施設や企業は5つある。生型鋳造での技法の制作体験が多く、その他には模様付けや原型の制作ができる。原型の制作のみ後日完成品が郵送されるが、その他体験メニューはその場で持ち帰ることが出来る。商品の大きさや作業の難易度により価格は約 800～4,500 円、所要時間は 30 分～120 分と幅広い体験メニューがある。



写真2 能作のぐい呑み作りの様子



写真3 大寺幸八郎商店での体験の様子

表5 高岡銅器体験メニュー一覧

体験施設	制作物	価格	所要時間
鋳物工房利三郎	風鈴 ペーパーウェイト 箸置き 小皿	3,000 円	60 分
(株)HANBUNKO	ぐい呑み	4,000 円	120 分
NOUSAKU LAB (株) 能作	ぐい呑 小鉢 トレー 箸置き2個セット 昆虫チャーム3点セット ペーパーウェイト	4,000 円 2,500 円	90 分
(公財)高岡地場産業 センター	ぐい呑み ミニ水盤	中学生以上 1,000 円 小学生以下 500 円	30 分
大寺幸八郎商店	錫アクセサリー 表札、レリーフ作成	一般 2,000 円、団体 (8名以上) 1,800 円 銅 12,960 円、 アルミ 6,480 円	20 分～30 分 10 分～30 分

各工房のホームページから著者作成

1-2-5 近年の取り組み

高岡市は、特色ある地域づくりと地場資源を活用した産業振興で注目を集めており、銅器業界においても、行政や大学等の研究機関と連携し、新商品・新技術開発に取り組む新たな動きが出てきている。高岡市デザイン工芸センターで行われている新クラフト産業・育成事業では、産地ブランド新商品の開発、「自活力」産地プロデューサーの育成を目的としており、ディレクターとして安次富隆氏などを招き新商品の開発などを行っている。特にHiHillのプロジェクトでは、建築やインテリア分野に対してのサンプルを作りグッドデザイン賞特別賞を受賞した。現在は「課題のデザイン」というデザイン開発プロジェクトを実施している。また、「高岡銅器の高い技術」と「クリエイターの先進的な発想」によって、現代のライフスタイルにマッチする新たな商品を開発する高岡発のブランド「KANAYA」など、伝統技術に新しいデザインを取り入れた新たな商品の開発や、販路の拡大に取り組んでいる¹¹。

1-2-6 課題

高岡銅器は、安価な外国製品との競合や生活様式の変化により、販売額がピークの平成2年から現在3分の1となっている。従事者数もそれに伴って減少するとともに高齢化が進行しており、不況の中で若手後継者の確保が非常に困難な状況となってきた。しかし、製造業者による新しい商品開発や販路開拓などで、ここ最近の販売額は横ばいになっている。若手後継者と高岡銅器のリピーターとなるようなコアなファンが少ないことが課題と考える。

¹¹ 2018/02/09 高岡市デザイン工芸センター日野利氏ヒアリングより

1-3 庄川挽物木地

1-3-1 歴史的経緯

庄川挽物木地の歴史は16世紀の終わり頃から始まる。現在の金沢市周辺を治めていた加賀藩が、富山湾に繋がる庄川を利用してヒノキやケヤキなどの運搬を行うようになった¹²。やがて、運搬の際に流れから外れてしまった流木が庄川町の貯木場に集積していったことが、後に庄川挽物木地の発展につながったといわれている。

詳しい時期は不明だが、江戸時代後半になると集積した木材を何かに活かせないかと、木地の生産が行われるようになった。そして明治時代に入ると、ろくろを使用した加工が行われるようになった。このろくろを使用した木地づくりこそ、庄川挽物木地の始まりだといわれている。豊富な木材を活かし、その杢目の美しさをより引き出す横挽きが特徴となっている。

現在も引き続き全国の漆器産地へと木地が出荷されているほか、庄川挽物木地としてのクラフト品も数多く生産されるようになった。

1-3-2 生産額(販売先)、従事者数の推移

生産額は詳しくは不明であり、現在はもう組合全体での生産販売額の集計は行われていない。庄川木工協同組合の但田一彦理事長によると、生産された木地は全国各地の漆器産地へと出荷され、県内よりも県外への出荷量のほうが多いとのことである。

表6 加盟企業数・従事者数・生産額の推移

	企業総数	従事者総数	生産額
平成13(2001)年	29	75人	334百万円
平成16(2004)年	24	65人	不明
平成17(2005)年	24	48人	254百万円
平成30(2018)年	13	16人	不明

全国伝統的工芸品総覧 14年版、18年版、および2018年1月18日ヒアリングより

組合への加盟企業数や従事者数・生産額については、昭和44(1969)年に設立された庄川木工組合のデータから引用すると表6のように推移している。

現在行われている後継者育成・技術伝承事業については、庄川木工協同組合が独自に技術伝承のための書類やDVD資料を製作している。また、製作において必須技術となるろくろの扱いや鉋の鍛冶技術(火造り)は一人前になるまで、十年かかるといわれている。そのため、

¹² 「庄川挽物木地(しょうがわひきものきじ・富山県)の特徴-KOGEI JAPAN(コウゲイジャパン)」
(https://kogeijapan.com/locale/ja_JP/shogawahikimonokiji) 2018/3/2 閲覧

戦前は義務教育の小学校を卒業するとすぐに修行に入る職人が多かった。

1-3-3 生産工程・原材料など

工程 1：原木

原木の状態を外面から判断して、製品の種類、寸法に合ったものを選定する。

工程 2：製材

原木使用寸法の厚さに板びきにする。横木で加工する(道管が器に平行に走る)ため、年輪がさまざまな形で表れることが特徴で、この作業は製材所に委託されることが多い。

工程 3：板づみ(写真 4)

木をゆがみにくくするため、製材した板材を六ヶ月から一年板づみにして自然乾燥させる。

工程 4：木取り

描かれた円よりやや大きめに外側を丸のこ機で引き落とす。

工程 5：荒挽き

大まかな形をろくろを使って削りだす。

工程 6：乾燥

荒挽きした材料を乾燥室に入

れ、水分 8%まで火力乾燥させてから乾燥室から出し、再び水分が 12%に戻るまで外気にさらす。

工程 7：仕上げ

十分乾燥戻した材料を外仕上げ、中仕上げの順に木地製品にしていく。

工程 8：拭漆塗(写真 5)

仕上がった白木地に生漆を数回塗り重ね木目を美しく見せる¹³。

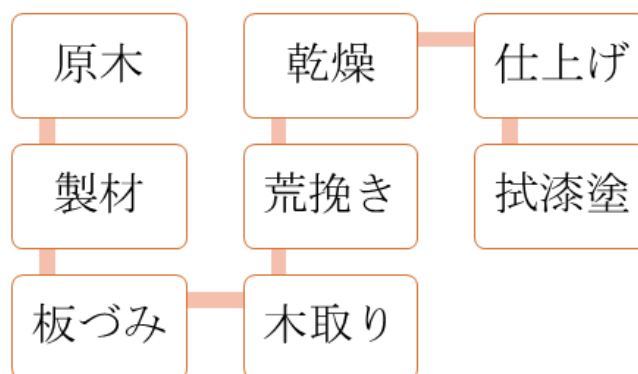


図 6 庄川挽物生地の生産工程

(著者作成)



写真 4 板づみの様子

¹³ 「庄川木工協同組合サイト」

(www.shokoren-toyama.or.jp/~mokkou/about/03.html)

庄川挽物木地に使われる木材は、主にケヤキかトチである。ケヤキは硬くて重量感があり、杢目が美しいことが理由である。また、トチは漆との相性がよく、変形が起きにくいいため漆製品の木地としてよく使用される。近年ではケヤキやトチだけではなく、クワやエンジュなどほかの木材が使用されることも増えてきた。



写真5 拭漆塗の様子

しかし、トチについては平成元(1989)年頃から資源の枯渇が問題化しており、木材の価格上昇が生じている。そこで代替品としてイチョウが使用されるようになったが、品質はトチのほうが優れていると職人側は感じるというアンケート結果が見られた。一方で、トチとイチョウの品質の違いについて、消費者や小売店など買い手側からの評価は変わらないという結果も出ている¹⁴。

また、製造にあたって必要になる道具はろくろや丸のこぎり、カンナやサンドペーパーといった一般的な道具が使用されているが、これらの道具を扱う技術に特殊性が強く出ている。

代表的な技術は二つあり、一つ目は「横ロクロ」という技術だ。横ロクロは、木地を挽く職人の右方向にロクロを取り付け、回転軸と平行して座って挽く方法である。横ロクロを挽く職人は、ロクロを据え付けた同じ高さの床にじかにあぐらをかき、ひざで鉋枕の足をおさえ切削刃物を両手に鉋枕を支点に操作して作業する。ロクロの回転数は毎分 600～3,000 回と、他産地の 2～3 倍の速度で削る¹⁵。この差は木材を丸太などからどのように切り出すかという木取りの作業から生まれる。庄川では木が成長する方向に沿っても木材を切り出す「横木取り」を行っており、その木材を横ロクロで挽きだす。石川県の山中地域でも挽物木地が生産されているが、そこでは丸太をぶつ切りにしたのから木材を切り出す「縦木取り」を行っている。縦木取りした木材と横木取りした木材では、鉋の刃物あたりも変わってくるため美しく削ることのできる速度も変わってくるので、このような差が生まれるのである¹⁶。縦木取りの木材は変形しにくく衝撃にも強い製品が出来上がることに對し、横木取りの

¹⁴ 「庄川挽物木地/生産基盤データベース」

(www.kougeinet.jp/critical_genzairyuu.php?SNO=206&kougeihin_id=100&Q2_3=%C6%CA%A1%CA%A5%C8%A5%C1%A1%CB) 2018/2/23 閲覧

¹⁵ 「庄川木工協同組合サイト」より (www.shokoren-toyama.or.jp/~mokkou/about/03.html)

¹⁶ 2018/2/13 庄川木工協同組合(但田一彦理事長)へのヒアリングより

木材は木目が美しく、木から効率よく木材を切り出すことに優れている。

二つ目の技術は、「火造り（匏造り）」である。匏は木地師にとっては欠かせない技術であり、さらに匏を自分の使いやすいように叩いて調整する作業も必須技術となる。

1-3-4 工房見学と体験メニュー

工房見学を行っている施設は2つある。

1つ目は「木の駅・木芸館（嶋田工芸）」で、こちらでは庄川挽物木地だけではなく井波彫刻の実演販売が行われている。実演の見学は無料で、絵皿体験なども可能だ。しかし、平成30(2018)年1月11日に当施設に連絡をしたところ、見学や実演担当の職人が亡くなられたため、現在は産業観光事業が行われていないという。

2つ目は庄川水記念公園内の施設「庄川特産館」だ。こちらでは実際の製品の展示・販売が行われており4~11月の日曜日には庄川木工ろくろの実演体験も実施している。しかし、庄川特産館はあくまで展示・販売の場であり実際の工場ではないため、庄川挽物木地の工場を見学できる現場は現在存在しない状況である。また、製作体験については、施設側が積極的に体験を勧めているというわけではなく、実演見学や庄川挽物木地に関するDVD鑑賞を行った後に希望者がいれば体験を行うだけだという。



写真6 ペン立てと鍋敷き



写真7 実際の体験の様子

製作できるものはペン立てや鍋敷き・皿などで、料金はいずれも 1,000 円である。実演する職人は組合加盟者によるローテーションで行われ、製作体験の際は職人がほぼマンツーマン方式で指導を行う。また、庄川特産館にて毎年 5 月 3、4 日に行われる「庄川木工まつり」でも同様の体験が可能である。当日はそれに加えて、木皿に絵付けを施せる体験も実施されている。

1-3-5 近年の取り組み

近年の取り組みとしては、大きく分けて二つある。一つはネット通販の体制が整えられ始めたことである。こちらは庄川木工協同組合の公式ホームページからだけでなく、「わたなべ木工芸」など各工房が独立してホームページを立ち上げるケースもある。そして、独立して通販を行うような企業は他の面でも積極的で、全国各地で製品の展示会を行うなど精力的な活動が比較的多く見られた。

二つ目は従来にない新商品の開発だ。先ほど工房見学ができると紹介した「木の駅・木芸館」を運営する嶋田木工では小さく丸みを帯びた形状のツボ押しや、お供えにも使える鏡餅型の器などが見られた。また、わたなべ木工芸では白木のパン切り台など現代の生活スタイルを反映した製品も販売されており、こちらは NHK の番組でも紹介された。

加えて、直接的な取り組みではないかもしれないが、平成 29(2017)年の春から庄川付近では新たな観光施設(道の駅や温泉施設)が続々とオープンしている。特に、道の駅では庄川の特産品を販売するほかカフェスペースも併設されており、そこでは庄川産の食材を使った料理を庄川挽物木地の器で提供するサービスも開始した。道の駅は庄川水記念公園にも近い位置にあるため、これによる波及効果として庄川挽物木地についての知名度も上昇するのではないかという期待ができる。

1-3-6 課題

最も根幹にある問題は、情報発信力の弱さである。この問題は売上高の減少や後継者不足など様々な悪影響を引き起こし、「売上高の減少→後継者が集まらない→生産額の減少→売上高の減少」といった産地を弱らせる負のサイクルを加速させる。庄川挽物木地も、職人の高齢化とともに後継者不足が深刻化し、技術の伝承も危ぶまれるという“負のサイクル”の中にいると感じられた。

情報発信力の弱さの例として、庄川木工協同組合の HP の更新の頻度の少なさが挙げられる。また、現存する多くの工房もネットでの情報発信を全くしておらず、先述した一部の例外を除いて、産地全体が有力な情報発信ツールであるインターネット環境に対応できていないと感じられた。メディアに取り上げられることで大反響を呼ぶような魅力的な製品があるにも関わらず、そういったツールに対応できていないのは非常に惜しいことである。

また、発祥から続いていることであるが、生産された木地の約 6 割が全国の漆器産地へと出荷されることも課題である¹⁷。なぜなら、生産できる木地の量も減少している中、市場に「庄川挽物木地」として売り出せるものが少ないことになり、知名度の向上につながっていない。

どのように対策を打つかという問題については、今が最大の好機であり、その対応が急がれる。先述した通り庄川全体で新たな施設のオープンが続き、庄川に注目が集まっているこの時期を逃す手はない。この機会をどう活かし、改めて庄川挽物木地という伝統工芸について各地にPRできるかに、今後の後継者不足問題がかかっていると考えられる。

また、その対策についても職人が激減している産地の現状を鑑み、可能な限り最少の労力で最大の成果を上げられる対策を考案していく必要があると思われる。

¹⁷ 2018/2/13 庄川木工協同組合 理事長 但田一彦氏へのヒアリングより

1-4 越中和紙（五箇山）

1-4-1 歴史的経緯

和紙の起源は、中国で起こった製紙法が日本へ伝わり、その後各地で日本独自の製紙法ができたことに始まる。五箇山和紙については、その起源は定かではない。五箇山和紙は、八尾和紙、蛭谷和紙と共に越中和紙に含まれるが、その越中和紙については、奈良時代に書かれた「正倉院文書」等の古文書に記されている。江戸時代からは八尾地方の和紙は薬用を初めとして様々なことに使用され、五箇山の和紙は加賀藩で使用する紙として盛んに生産された¹⁸。五箇山における紙漉きの起源については明らかになっていないが、藩政時代加賀百万石の領地では、五箇山和紙に関する古文書や記録文献が残っていることから、奈良や京都から直接伝えられた和紙の技法が山村の人々によって独自の和紙文化に形成されたものと考えられている。藩政時代の五箇山和紙は、天正 13（1585）年頃は五箇山の産物である生糸とともに年貢として納められていた。また、五箇山和紙は他に流出しないように塩硝（火薬）とともに藩の指定生産物となった。戦後、昭和 25（1950）年に伝統の五箇山和紙を残すべく「五箇山和紙協同組合」が、昭和 43（1968）年には「東中江和紙生産組合」が結成され、全国的に生産地が次々と消滅する中であっても、伝統的な技術を守りながら、江戸時代から受け継がれる古典和紙の製造を継承している。洋紙の普及により和紙の需要が減る中、昭和 57（1982）年には、和紙の新たな製品開発、後継者育成をはかり「和紙の里」の前身となる「和紙工芸研究館」を設立した。そして昭和 63（1988）年、五箇山和紙は八尾和紙、蛭谷和紙とともに「越中和紙」として、国の伝統的工芸品に指定された¹⁹。

1-4-2 生産額（販売先）、従事者数の推移

現在、五箇山和紙の里のほかに二つの事業所があり、全部で三つの事業所がある。五箇山和紙の里で働くのは、12名おり、施設内で職人として働いているのは6名である。他の事業所も、小さな規模の事業所である。

平成 17(2005)年から平成 13(2001)年にかけて越中和紙全体（五箇山・八尾・蛭谷）の生産額は

表 7 越中和紙全体・年間生産総額

H. 13	297 百万円
H. 17	214 百万円

伝統的工芸品総覧 18 年度版、14 年度版より作成

表 8 五箇山和紙の里・年間売上額

H. 27	40,352 千円
H. 28	46,479 千円

2018. 2. 2. 五箇山和紙の里ヒアリングより作成

¹⁸ 「伝統工芸青山スクエア」(<http://kougeihin.jp/item/0902/>)

¹⁹ 「五箇山和紙の里 HP」(http://gokayama-washinosato.com/about_washi.html) より引用

大幅に減少している。しかし、平成 27(2015)年から平成 28(2016)年にかけての五箇山和紙の里での売上額は右肩上がりである。この売上額は、商品の売上と体験の売上を合算したもので、体験者数が増えたことも要因の一つである。体験者数は年々増加しており、その客層としては、半数以上が外国人である。交通の便の悪さからツアー客がほとんどで、五箇山全体を回っていくことが多い。また、海外からの客が多いことから、リピーターは多くない²⁰。

1-4-3 生産工程・原材料・道具

五箇山和紙の大きな特徴が、原料である楮から和紙が完成するまでのすべての工程を五箇山で行うという点である。また、五箇山で採取される楮は繊維が細く、長いので強く丈夫な和紙を作ることができる。これは、五箇山という標高の高い土地が、寒暖差の激しい環境を作るためである。主な原料としては、先に挙げた楮（こうぞ）、三桮（みつまた）、雁皮（がんび）、トロロアオイを使用している。楮は 4 月下旬から 11 月にかけて栽培する。栽培した楮すべてを使用するのではなく、余った楮は他の産地に販売している。先にも挙げたとおり、五箇山の楮は良質のため、欲しい人は多く存在する。和紙を漉く際には、簀（す）を使用しているが、この道具を作る職人は、現在五箇山に一人である。しかし、簀自体が頻繁に買い替えるものではないことから、現在いる職人も趣味半分で作っているような形態なうえ、高齢である²¹。

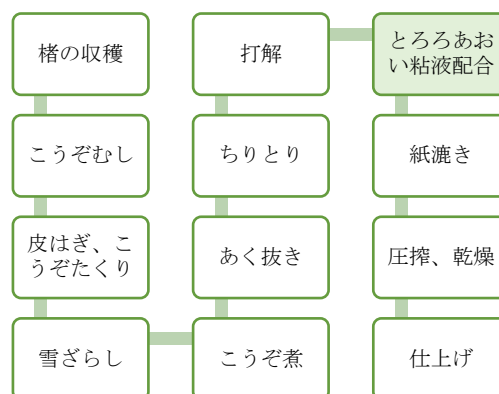


図 7 五箇山和紙の生産工程（著者作成）

1-4-4 工房見学と体験メニュー

どの事業所でも主として行っている体験は紙漉き体験のみである。五箇山和紙の里で現在行っている体験メニューとしては、ランチョンマットサイズの和紙を漉く体験（600 円）、はがき 3 枚を漉く体験（600 円）、夏季にはうちわ作り（1200 円）の 3 つのコースを実施している。うちわづくりは、和紙を漉いた後、うちわの枠組みに張り付ける作業が加わるため、1 時間程度かかるが、紙すき体験とはがき漉き体験は 15 分ほどで済むため、気軽に取り組むことができる。

²⁰ 2018/2/2 五箇山和紙の里（石本氏・野原氏）へのヒアリングより

²¹ 「五箇山和紙の里 HP」（http://gokayama-washinosato.com/about_washi.html）

今回実際に五箇山和紙の里ではがきサイズの紙漉きを体験した。写真8のように、はじめに用意されている既に染色されているモチーフを選ぶことができる。また、形もうさぎや桜、月、猫など種類豊富に用意されているので楽しんで選ぶことができた。モチーフを選んだあとは、紙漉きの工程に入る。はがきサイズのものを三枚一度に作ることでできる写真9のような木枠で漉いていく。木枠を原料の入った水の中に静かに入れ、持ち上げて縦と横に揺らす動きを繰り返す。作業としては単純だが、慣れない作業のため興味深く、少しずつ木枠の内側に楮がたまって、和紙が出来上がっていく様子を見ることが出来る。最後に乾燥器にかけ、保護のための加工をする。慣れない工程ばかりで集中して取り組んでいるうちに終わってしまい、15分はあっという間だった。また、和紙が出来上がる工程を実際に職人に教えてもらいながら体験ができて体験料600円と値段の面からみても手軽である。工房見学も随時行っており、声をかければ、職人に案内してもらいながらの見学も可能である。



写真8 五箇山和紙の里での体験の様子



写真9 五箇山和紙の里での体験の様子

表9 五箇山和紙体験メニュー一覧

体験施設	制作物	価格	所要時間
五箇山和紙の里	手すき和紙	600円	約15分
	はがき	600円	約20分
	うちわ	1,200円	約1時間
(農)五箇山和紙	手すき和紙	600円	約10分

事業所HPから著者作成

1-4-5 近年の取り組み

産業観光については、自らツアーやイベントなどを企画するといったことは行っていない。旅行会社がツアーの企画を持ち込み、そこに組み入れる形をとっている。先にも挙げたが、このツアーで訪れる客が来場者の大半を占める。稀に世界遺産バスを使用して訪れる人もいるが、帰りのバスの時間が合わないなど不便な点が多い。

また、五箇山和紙の里では、「FIVE」という新たなブランドを立ち上げ、様々な商品を展開する取り組みが行われている。県外や海外などの展示会に出展するなど、積極的な活動を見せている。他にも、(農)五箇山和紙では、和紙を用いた紙塑人形や、戦国武将をモチーフにしたお面など平面を立体にする技術を用いた立体造形の商品を作成、販売している。

《ブランド「FIVE」について》

五箇山和紙の里の職人で商品開発を主に担う石本泉氏が、デザインチーム「minna」と共に立ち上げたブランド。その設立のきっかけは2012年の東日本大震災で観光客が大幅に減少したことである。そこで、五箇山和紙や井波彫刻などの伝統工芸は、南砺市から新商品開発事業を依頼された。そのとき、石本氏は「商品を何か作って、単発で終わってしまうのはもったいない」と思い、何かできないか、と大学時代の友人であったデザインチーム「minna」に声をかけた。実際に五箇山の地に触れ、また、事業を長く続けたいという考えから、ブランドを立ち上げるという方向性が決まった。若い人は和紙に興味がないが、地元のお客さんからも発信してもらえるようなブランドを目指して「FIVE」が作られた。新鮮で、和紙のイメージを覆すようなものを考えた。2013年には展示会に出展し、さらに海外にも進出している。

商品は、県内を中心に販売している。写真10のようにそれぞれの事業所の売店で販売するほか、五箇山和紙の里としては東京の小規模の店、海外に商品を卸している。東京や海外に卸しているものは、直接の問い合わせや展示会からの繋がりをきっかけとしたものである。また、一般客向けの商品だけでなく、障子紙や建具建材も販売。両者の比率としては半々ほどで、建具建材も売れている。また、稀にはあるが要望に合わせて商品を開発するような依頼が来ることもある。

また、ブランド「FIVE」
としては、和紙と暮らし
のよみもの&オンライン
ストア「うるわし」²²でネ
ット販売も行っている。
そんな「FIVE」でもヒッ
ト商品といえるのが和紙
の名刺入れである（写真
11²³）。和紙特有の暖かみ
のある手触りと綺麗な染
色が目に鮮やかである。
さらに丈夫さが取り柄の
五箇山和紙で出来ている
ため長く使うことができる。これは、
海外でも人気となっている。

これまで挙げた体験メニューや商
品の情報発信は現在、HP、SNS、外
部で行うワークショップで行ってい
る。近年和紙が無形文化遺産になっ
たことや、白川郷・五箇山の合掌造り
集落が世界遺産に登録されたことか
ら雑誌やテレビから取材されること
も増えている。



写真 10 五箇山和紙の里売店



写真 11 CARD CASE 〈名刺サイズ〉

1-4-6 課題

生産能力が低いと、在庫を作ることができない。また、従業員の少なさ、高齢化が課題として挙げられる。五箇山和紙は、原料の生産から完成までのすべてを自分たちで手掛ける。そのため、和紙をつくるには多くの人手が必要になってくる。しかし、人員が不足していることから、五箇山和紙の里では、内職を市内で 10 人ほどに依頼している。また、楮を作る際には、塵取りと呼ばれる根気のいる作業工程があるが、その作業も、近隣の高齢者に任せているという。このような現状が、五箇山和紙を生産する 3 つの事業所にある。また、3 つの事業所同士の横のつながりの希薄さも課題として挙げられる。

²² うるわし HP より (<http://uru-washi.com/>)

²³ 「FIVE」HP より (<http://www.five-gokayama.jp/>)

1-5 井波彫刻

1-5-1 歴史的経緯

井波彫刻は、江戸時代中期に焼失した瑞泉寺本堂を再建する際に、井波の大工が京都の本願寺より派遣された御用彫刻師の前川三四郎に彫刻の技法を本格的に習ったことが始まりとされている。その後寺社彫刻の技法が欄間や獅子頭、天神様などの工芸品に派生し今日まで受け継がれている。以後、その門流が江戸時代末期頃まで主に社寺彫刻などにその技術を競い、明治時代に入ってから寺院欄間に工夫をこらして住宅用の欄間を制作するようになった。昭和に入ってから寺社彫刻は活発で、東本願寺・東京築地本願寺・日光東照宮など全国各地の寺社仏閣の彫刻を数多く手がけ、それと並行して一般住宅の欄間・置物などにも力を注いだ。

昭和 22 (1947) 年に井波彫刻協同組合を結成した。そして、同年に井波彫刻技能養成所(現訓練校)を設立し、その技法が伝承されてきた。昭和 50(1975)年には通産大臣より伝統的工芸品の指定を受けた。現在では伝統工芸だけでなく、日展などへの作家活動も盛んである。井波には伝統工芸士、一級井波木彫刻士をはじめ、組合員を含め約 200 名もの彫刻職人が集中しており、世界的にも珍しい木彫り彫刻を専門とする産地である²⁴。

1-5-2 生産額(販売先)、従事者数の推移

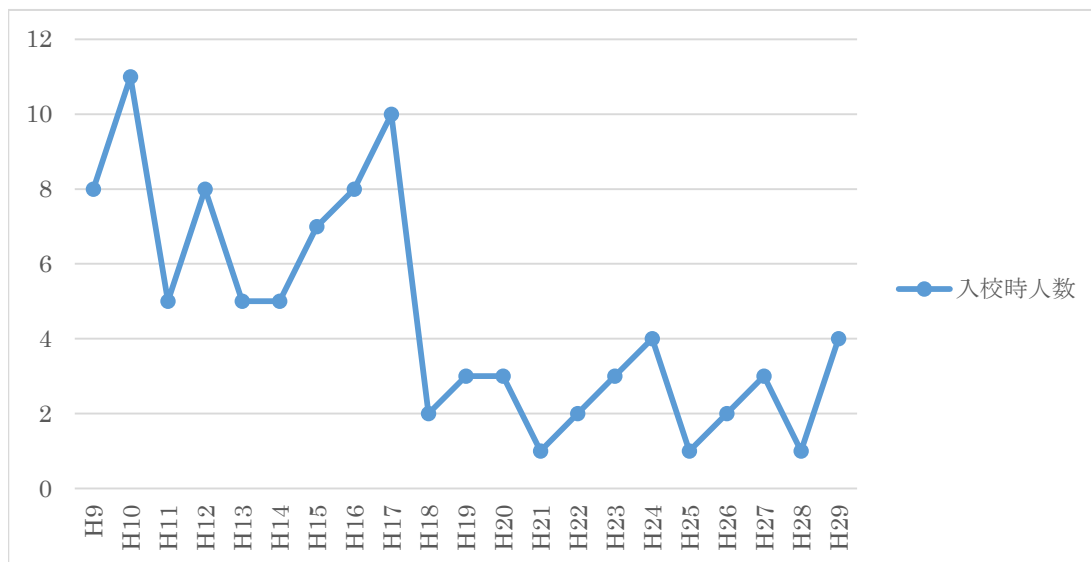
井波彫刻協同組合によると、生産額のピークは平成 2~3 年の 20 億円で以後は減少傾向にある。「全国伝統的工芸品総覧 14 年版、18 年版」によると、平成 13 年度は 14 億円、平成 17 年度は 10 億円である。組合では平成 20 年からは 8 億円と報告している。商品は職人の工房や井波彫刻総合会館、全国各地で開催している展示会等で販売しているほか、受注生産も行っている²⁵。井波彫刻は問屋制度をとらないため、生産から販売までをすべて職人が行っている。

井波彫刻の事業者数は、図 8 のように推移している。後継者育成については、井波彫刻協同組合で 5 年制の「井波彫刻工芸高等職業訓練校」を設けており、訓練校の生徒は普段は親方の元で修行しながら、週 1、2 回訓練校に通い、デッサンや彫塑などの勉強をしている。井波彫刻の職人になるためにはまずは訓練校に通い、親方のもとで最低 5 年間の修行をすることが義務付けられている。入門志望の問い合わせは全国各地から数多く来ているが、職人から弟子入りの受け入れ可能とみなされた者のみが入校できるため図 9 のように弟子入りの人数は年度によってかなり変動している。かつては、徒弟制度による技能訓練を行って

²⁴ 「井波彫刻協同組合公式ページ」(<http://inamichoukoku.com/>)

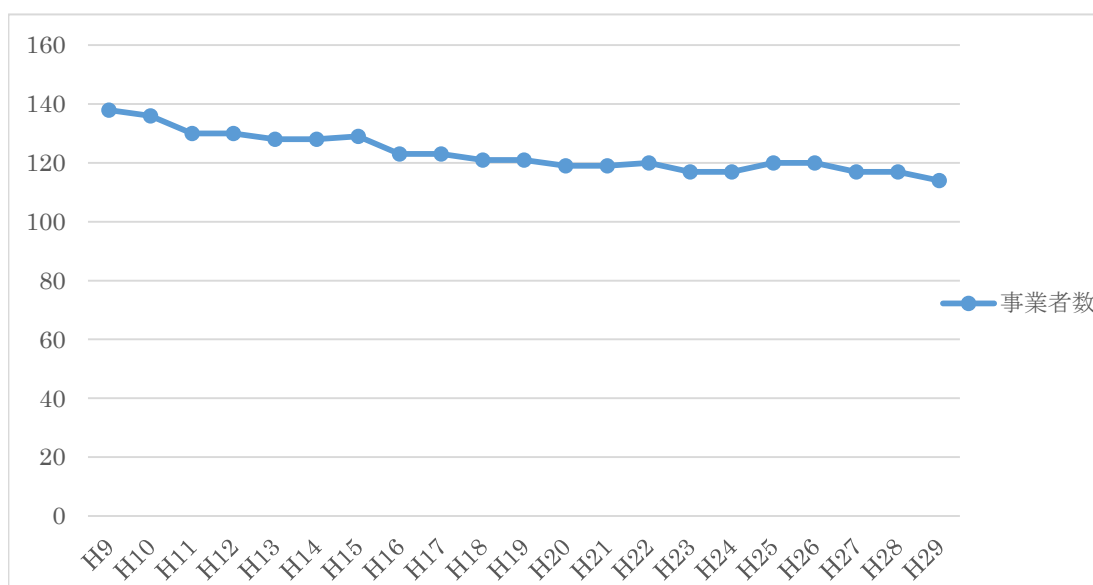
²⁵ 2018/02/05 井波彫刻協同組合へのヒアリングより

いたが、昔ながらの方法で現在も続けているのは南部白雲木彫刻工房のみである²⁶。



井波彫刻協同組合資料より著者作成

図9 弟子入り人数（訓練校入校時の人数）の推移



井波彫刻協同組合資料より著者作成

図8 事業者数の推移

²⁶ 2018/02/05 井波彫刻協同組合（亀田依理子主事）へのヒアリングより

1-5-3 生産工程・原材料・道具

およそ生産工程は以下のとおりである。

①原木選び

②半年～1年自然乾燥させる。

③大きさや厚さを考えて切る。

④材料の寸法内に図柄の構図を考え木炭で和紙に下絵を描く。

⑤穴あけ

下絵を材料に写し、図柄のおよそのアウトラインにそって、糸ノコ機で不要部分を切り取る。

⑥荒おとし

⑦図柄全体の不要な部分を15～16種類の荒けずりノミをゲンノウでたたき彫り崩して、りんかくの大体の目安をつける。

⑧約1ヶ月間自然乾燥させる。

⑨荒彫り

図柄全体をさらに70種類のノミを使い分け彫り下げ表面をより量感的にする。

⑩小彫り

さらに彫刻を浮き上がらせるため、細い荒彫りノミ200数本を使う。ここまでの工程を裏面も同様に仕上げる。表を鏡で写し、穴空けしたすき間から表と裏がずれないように彫っていく。

⑪仕上げ彫り

細かい部分を緻密に彫り、ペーパー類は、一切使用せずにノミだけで仕上げる²⁷。

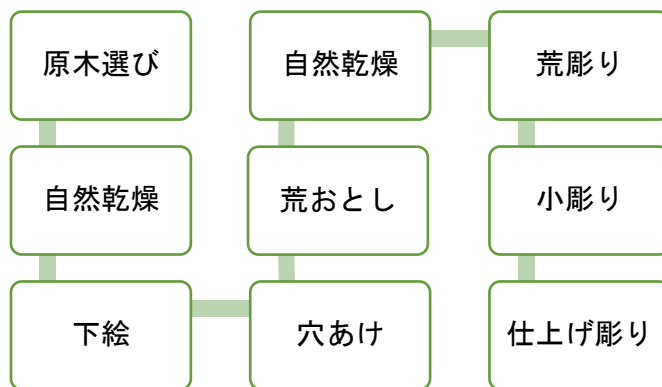


図10 井波彫刻の生産工程

(著者作成)

井波彫刻の特徴は、「透かし深彫り」という技法による立体感のある高度な木彫刻技術である。井波彫刻では、職人は通常約200本のノミを持っており、作業では100～120本のノミを使い分ける。ノミは荒彫り用といわれるものから仕上げ用の彫刻刀にいたるまで、職人自らが加工制作し、その数は職人によってそれぞれであるが30種類を超える²⁸。原材料は主にクス、ケヤキ、キリ等を使用し、主に九州から仕入れている。完成日数の目安は、欄間は2枚1組で約三ヶ月、獅子頭は約三週間である。

²⁷ 「井波彫刻協同組合公式ページ」(<http://inamichoukoku.com/>)

²⁸ 2018/02/05 井波彫刻協同組合(亀田依理子主事)へのヒアリングより

1-5-4 工房見学と体験メニュー

工房見学は、いなみ木彫りの里創遊館にある「匠工房」で行われており、そこで職人たちの作業風景や作品を見学・購入することができる。また、八日町通りにある彫刻師の工房や井波彫刻総合会館でも彫刻の実演を見学することが可能である。

井波彫刻の体験については、主に南砺市観光協会が実施している「木彫り手習塾」と、いなみ木彫りの里創遊館の木彫刻体験教室「くりえ〜と工房」で行われているものがある。

「木彫り手習塾」は、「工房コース」「体験コース」「塾コース」の三種類の体験コースがある。

「工房コース」は、日展作家や伝統工芸士の工房で直接デザイン、下絵の書き方やノミの使い方まで作家の指導が受けられる。時間内に仕上がるように下準備を加えた材料が準備されており、経験者は技術に応じてコースを選択できる。自分の銘を入れ、作品を持ち帰ることも可能である。「体験コース」は、井波彫刻協同組合推薦の井波彫刻師指導のもと、ネームプレートやお盆等を短時間でつくる手軽なコースである。体験メニューは1時間コースと2時間コースの二種類がある。「塾コース」は、本格的な井波彫刻を体験、または勉強する長期体験教室で、伝統技法の習得や時間をかけて作品制作に取り組みたい人向けに、月に2回開講している²⁹。

いなみ木彫りの里創遊館「くりえ〜と工房」で現在行っている体験メニューとしては、銘々皿、小物入れ、絵皿等の制作体験がある。定期的に富山県内の小中学校が体験教室に訪れ、皿や小物入れの木彫り体験教室をすることもできる。体験の講師は、基本的に木彫りの里創遊館の江尻氏と井波彫刻師の山根氏の2人体



写真12 木のぐい呑み作り体験の様子



写真13 木のぐい呑み

²⁹ 「井波彫刻体験 ～木彫手習塾～ | 南砺市観光協会 | 五箇山」より
(http://www.tabi-nanto.jp/genre_play_01/post_399.html)

制で行っているが、組合の彫刻師が体験の指導をすることもある³⁰。

また、新しい体験メニューとして南砺市観光協会と(株)木彫りの里創遊館が発案した「木のぐい呑み作り体験」を平成 29(2017)年 4 月から実施している。職人の指導のもと、あらかじめ中がくり抜かれたヒノキを筒型・グラス型を基本として写真 12 のように外の形を好きなように彫り、サンドペーパーやヤスリなどは一切使用せず、ノミや彫刻刀など本格的な道具を使って作品を仕上げる。ヒノキは刃物で削ったり水を吹きかけたりすると、リラクゼーション効果のある香りが立ち、削った際に出た木くずも土産品として持ち帰ることが可能である。体験後は井波のまち散策と「若駒酒造」で、作ったぐい呑みで地酒の試飲を楽しむことができる。この体験は各種メディアでも多く取り上げられ、特に関東・関西からの女性観光客に人気があり、リピーターも獲得している³¹。

表 10 井波彫刻体験メニュー一覧

体験施設	制作物	価格	所要時間
いなみ木彫りの里創遊館 くりえ〜と工房	銘々皿	800 円	約 1 時間
	小物入れ	1,300 円	
	筆箱	1,300 円	約 2〜3 時間
	木のスピーカー他	3,500 円〜	
黒髭庵	木のぐい呑み	2,200 円	約 1 時間
彫刻師の工房 (木彫り手習塾 工房コース)	パネル	10,000 円	半日〜1,2 日
	千支の置物	15,000 円〜20,000 円	1〜2 日
	オリジナル木彫り作品	要相談	要相談
いなみ木彫りの里創遊館 くりえ〜と工房 (木彫り手習塾 体験コース)	ネームプレート	1,500 円	約 1 時間
	お盆	3,000 円	約 3 時間
	雲の彫刻 他		
いなみ木彫りの里創遊館 くりえ〜と工房 (木彫り手習塾 塾コース)	表札 天神様 欄間 獅子頭 他	10,000 円(1 ヶ月)	約 4 時間 (月 2 回開講)

各工房のホームページから著者作成

³⁰ 2018/02/17 いなみ木彫りの里創遊館 (江尻大朗氏) へのヒアリングより

³¹ 2018/02/17 いなみ木彫りの里創遊館 (江尻大朗氏) へのヒアリングより

1-5-5 近年の取り組み

近年の取り組みとしては、様々な新商品が開発されるなど井波彫刻の新たな可能性に挑戦している。

井波彫刻協同組合では、よさこい鳴子踊りやYOSAKOIソーランで使う「鳴子」に井波彫刻を施した新商品を開発している。南砺市商工会の小規模事業者地域力活用新事業全国展開支援事業の一環で、組合のブランド戦略メンバーがサンプルを制作し、現在全国のよさこいチームや外国人に向けて売り込みを図っている³²。

「南部白雲木彫刻工房」では、井波彫刻の新たな需要開拓に繋げるために、現在井波彫刻の技術を活かした「木彫り看板サイン」に力を注いでおり、店舗に合った個性的な木彫刻看板を数多く手がけている。井波では木彫の看板が増えてきたため、全国に向けて木彫り看板用のWEBサイトも開設する予定である。また、南部白雲木彫刻工房の姉妹

工房である「よしみ工房」では、全国の社寺を中心に木のオリジナル授与品を企画・制作している。兵庫県湊川神社の安産祈禱の授与品として制作した妊婦が握れる安産祈願のお守り「子玉守り」は、安産祈禱の際にしけ絹の袋に入れて渡し、お礼参りでは子玉守りと交換で「楠子供守」を授与する(写真14)。東京大神宮の縁結びのお守りは材質にエンジュを選び、当て字で「縁授守り」と名付けるなど、神社の由来や素材の意味を考えて授与品の企画



写真14 楠子供守（右）と子玉守り（左）



写真15 うさぎおみくじ

³² 2018/02/05 井波彫刻協同組合（亀田依理子主事）へのヒアリングより

や制作をしている。

最近では、平成 30 年 1 月から南砺市の越中一宮高瀬神社に設置している「大国さまのおさとし・うさぎおみくじ」と名付けたおみくじを制作した（写真 15）。おみくじは、楠を長さ 3 センチ程度の繭玉のような形に加工したものに、うさぎの紋様を施している。紋様は 20 種類で、それぞれに意味があり人生の指針を示している。箱からひいたおみくじ（500 円）はお守りとして持ち帰ることができ、城端の松井機業の「しけ絹」で作ったお守り袋（300 円）も用意した³³。

さらに、建築家や彫刻家などの職人が集まった任意団体「コラリアルチザンジャパン」が、空き家を活用したゲストハウス「BED AND CRAFT」を井波にオープンし、ゲストハウスの宿泊者に井波彫刻師の工房で弟子入り体験をしてもらうという新たな観光活性化に取り組んでいる。「BED AND CRAFT」では、「KIRAKU-KAN」「TATEGU-YA」「MOMO-HOUSE」の 3 施設をゲストハウスとして提供している。それぞれ 1 日 1 組限定で、価格は 1 泊 1 人あたり 6,000 円からで、体験料は別途 6,000 円が必要となる。訪日外国人客から人気があり、宿泊客の 8 割が欧米人で、2 割が日本人を含めたアジア系の人々である³⁴。

1-5-6 課題

生活様式や住環境の変化によって欄間の需要が落ち込んでいることや、海外で安い賃金で作られた輸入欄間が後をたたないこと、市場が北陸三県に偏っていて需要が伸びないということが原因で、ピーク時と比べると 10 億円以上も生産額が減少している。そのため時代のニーズに合った新たな需要となる商品開発・販路開拓が必要である。また、後継者は確実に育っているが、訓練校を卒業すると故郷に帰ってしまうので地元で根付いた後継者が不足していることも課題に挙げられる。

³³ 2018/01/29 南部白雲木彫刻工房（南部望氏）へのヒアリングより

³⁴ 「観光 Re:デザイン」（<https://kankou-redesign.jp/pov/5675/>）

1-6 小括

呉西地区の伝統工芸品は各産地の風土に根付いた歴史的経緯があり、それぞれ高岡漆器の勇助塗や青貝塗などの技法や高岡銅器の鑄造技術、井波彫刻の高度な彫刻技法のように伝統的な技法が受け継がれてきている。しかし、五箇山和紙を除いた産地では、生産額が減少する傾向にある。また、高岡漆器、高岡銅器、庄川挽物木地については従事者数も減少傾向にあり、井波彫刻のように従事者数自体に大きな減少が見られない産地もあるが、地元根付いた後継者が不足しているなど、どの産地も共通して後継者不足や人手不足、人材の高齢化などに悩まされている。そうした中で、近年では、新商品の開発などが各産地で行われており、高岡市と民間が連携し商品を開発したり、五箇山和紙で「FIVE」というブランドが立ち上げられたりしている。また産業観光への取り組みも行われており、さまざまな体験メニューの開発が行われている。高岡漆器では螺鈿細工・蒔絵体験、高岡銅器では主に鑄造体験、庄川挽物木地ではろくろの実演体験、五箇山和紙では紙漉き体験、井波彫刻では彫刻体験があり、どの産地でも制作体験を行っている。これらが各メディアに取り上げられることで注目が高まってきている。しかし、人材不足などにより体験に消極的な姿勢の産地も多い。また、商品開発などで成功した事例もいくつか見られるが、販売額は伸び悩んでおり、未だ将来性が不透明のままである。その中で新たな人材を受け入れることは困難であり、特に後継者不足や人材育成を課題としている産地が多い。また、新商品の開発や販路の開拓、情報発信力を強めるといった課題もあげられる。

第2章 呉西地区におけるニューツーリズムの取り組み

2-1 ニューツーリズムとは何か

まずはニューツーリズムの定義について述べていこう。観光庁によると、その定義は「従来の物見遊山的な観光旅行に対して、これまで観光資源としては気付かれていなかったような地域固有の資源を新たに活用し、体験型・交流型の要素を取り入れた旅行の形態」³⁵とされている。ニューツーリズムと一口に言っても、どういったものを観光資源として取り上げるかによってその名称は変わってくる。本研究の主題にもかかわってくる「産業観光」も地域の様々な産業を観光資源として扱うニューツーリズムのうちの一つとなっている。

表 11 観光立国推進基本計画(2007年6月閣議決定)に位置づけられたニューツーリズム

エコツーリズム	自然環境や歴史文化を対象とし、それらを損なうことなく、それらを体験し、学ぶもの(ホエールウォッチングや植林ボランティアツアーなど)
グリーンツーリズム	農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動(農作業体験、農林漁家民泊、食育など)
文化観光	日本の歴史、伝統といった文化的な要素に対する知的欲求を満たすことを目的とするもの
産業観光	歴史的・文化的価値のある工場等やその遺構、機械器具、最先端の技術を備えた工場・工房等を対象とした観光で、学びや体験を伴うもの
ヘルスツーリズム	自然豊かな地域を訪れ、そこにある自然、温泉や身体に優しい料理を味わい、心身ともに癒され、健康を回復・増進・保持するもの
その他	フラワーツーリズム 長期滞在型観光 等
新しい観光連携分野	
スポーツ観光	プロ・アマスポーツ観戦等の「見るスポーツ」 マラソン、ウォーキング等の「するスポーツ」への参加を目的とする観光
医療観光	外国人が日本の医療機関等での治療、検診等を目的として訪日旅行し、併せて国内観光を行う
ファッション・食・映画・アニメ等×観光	日本のファッション・食を目的とした訪日旅行、ヒット映画のロケ地訪問、アニメ関連スポット訪問等

『ニューツーリズムの振興 | 観光地域づくり | 政策について | 観光庁』より
(www.mlit.go.jp/kankocho/page05_000044.html) 2018/3/4 閲覧

³⁵ 『ニューツーリズムの振興 | 観光地域づくり | 政策について | 観光庁』
(www.mlit.go.jp/kankocho/page05_000044.html) 2018/3/4 閲覧

表 11 は、観光庁によって定められた主なニューツーリズムとその概要の一覧を表したものである。これらニューツーリズムについて共通して言えることは、“テーマ性が強く、体験型・交流型の要素を取り入れた新しい形態の旅行”³⁶ということである。この特色は、観光客をリピーターとしてまた地域に訪れさせる力をもっている。それは、強いテーマ性や体験が観光客の旅行への満足度を上げる効果を持っているからである。そして数あるニューツーリズムの中でも、産業観光は特にそのリピート率が高くなっている³⁷。

これらの中から代表的なものをいくつか抜き出して、全国各地で行われている具体例とともに紹介する。

◆エコツーリズム 一鹿児島県・屋久島での事例一

エコツーリズムは、山、海、川など様々なフィールドで行われている。特に、鹿児島県の屋久島では、縄文杉や白谷雲水峡などの山岳環境、周辺の海といったその豊かな自然環境を活かしたエコツーリズムへの取り組みが盛んに行われている。

また、屋久島にはツアーの担い手となるガイド事業者が 100 名以上いるとも言われている。そこで多数存在する事業者の「ガイドとしての資質」をより明確に図るため、2016(平成 28)年には「屋久島公認ガイド制度」なるものも開始された。屋久島公認ガイドの事業者は、屋久島町エコツーリズム推進協議会の公式HPでプロフィール・公認を受けた分野・所持資格とともに紹介される。利用者はそれを見て、各ページから事業所HPへと移動しツアーの申し込みができる。この制度の導入により、観光客が更に屋久島でのエコツーリズムを安心かつ気軽に楽しめるようになったといえる。

ここで、屋久島で実際に行われているエコツーリズムの例を1つ挙げる。

○縄文杉 1日トレッキングコース

- ・ガイド：渡邊 剣真氏
- ・料金：12,000 円
- ・所要時間：10 時間
- ・催行人数：1 人~7 人
- ・特記事項：4 人以上 10%割引



「渡邊 剣真 | 屋久島公認ガイド〈屋久島町〉」HPより
(www.yakushima-eco.com/log/guide/渡邊-剣真/#)
2018/3/9 閲覧

写真 16 体験の様子

³⁶ 産業観光推進会議『産業観光の手法 企業と地域をどう活性化するか』第1版
株式会社 学芸出版社 2014年 p43

³⁷ 産業観光推進会議『産業観光の手法 企業と地域をどう活性化するか』第1版
株式会社 学芸出版社 2014年 P48

◆グリーンツーリズム—群馬県での事例—

グリーンツーリズムはその性質上から長期滞在型になることが多く、将来的にはに居住型観光(都会と地方の観光地の両方に住居を持ち、行き来すること)へと発展する可能性がある³⁸と期待されている。

今回事例として紹介する群馬県でもグリーンツーリズムは盛んで、県内の複数の農山村地域でそれぞれ特色ある体験が行われており、活動に対する補助も複数ある。(地域興しマスターの派遣制度など)

以下は群馬県みなかみ町で行われている農家民宿のグリーンツーリズムの一例である。

○農家民宿 おめんの家 (写真 17)

- ・体験メニュー：農作業体験、おめんの絵付け、郷土食作り体験
- ・料金：1泊素泊 3,500 円(税別)
1泊2食付 5,500 円(税別)
- ・体験期間：通年
- ・受入人数：3~5 人



「農家民宿 | 体験施設一覧 | 群馬県グリーンツーリズム」より

(www.gunma-gt.jp/experience/category/guest_house/) 2018/3/10 閲覧

写真 17 農家民宿の外観

³⁸ 須田 寛『新産業観光』第5刷 (株) 交通新聞社 2009年 p73

◆ヘルスツーリズム—和歌山県・熊野での事例—

ヘルスツーリズムといっても様々なタイプがあり、本格的に医療を目的とした糖尿病食改善旅行やアトピー性皮膚炎緩和旅行、人工透析旅行など医療観光寄りのものから、観光をしながら健康を目指すヨガレッスン旅行や自然体験旅行などレジャー的な側面が強いものまである。

今回紹介する和歌山県・熊野のヘルスツーリズムは後者の「観光しながら健康を目指すレジャータイプ」の面が強い。

○熊野古道健康ウォーキング

・プログラムの流れ

- ① 事前の健康チェック(体調問診・血圧測定)
 - ② 準備運動(プレウォーキング、ストレッチ・準備体操、瞑想)
 - ③ ウォーキング(写真 18)
(鳥の声、光、風、森林など熊野の自然で五感を刺激する)
 - ④ メンテナンス(ストレッチ)
 - ⑤ クールダウン(アロマを利用したストレッチ指導など)
 - ⑥ 温泉
(古人も利用した温泉で体を温め、血液の循環を促進する。
疲労物質のスムーズな排出を促す効果的なマッサージ法もレクチャー)
- ・参加費：3,000 円(弁当・保険代込みで入浴は別途料金が必要となる)
- ・開催期間：毎月第 3 日曜日に定期開催



『ウォーキングツアー—熊野で健康ラボ』

(<https://www.kumano-de-kenko.com/walking-event/>) 2018/3/10 閲覧

写真 18 ウォーキングの様子

◆ロケツーリズムの事例—富山県での事例—

ロケツーリズムとは、「従来のロケの誘致に力点を置いたフィルムコミッションの取り組みと比べ、ロケの観光面での活用に力点を置き、地域活性化につなげることを目的とする」

³⁹であり、これが観光庁によるロケツーリズムの定義である。映画や朝ドラ、大河ドラマなどのロケ地を観光に活用するこのニューツーリズムは、ここ富山県においても比較的盛んにおこなわれている。富山県では、「ロケ誘致による観光振興、地域活性を目的に、平成 23 年に県のフィルムコミッションの総合的窓口として『富山県ロケーションオフィス』（富山県観光課内）を発足」⁴⁰しており、これまでに十一作品を誘致し支援を行った。

中でも映画「脳男」での爆破シーンのロケ地となった廃病院では、ロケ地見学会を実施し、参加者には地元で食事もしてもらえる仕掛けづくりをした。そして映画公開に合わせロケ地マップ作成し、首都圏の劇場を中心に配布している。

³⁹ 『ロケツーリズム | ニューツーリズムの振興 | 観光地域づくり | 政策について | 観光庁』
(www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/locatourism.html) 2018/3/10 閲覧

⁴⁰ 観光庁のロケツーリズム事例集の PDF データより

2-2 呉西地区のニューツーリズム

2-2-1 能作の体験事例

富山県の産業観光について語るうえで、株式会社能作の事例はやはり外せない存在である。株式会社能作は大正 5 (1916) 年から続く富山県高岡市の鋳物メーカーであり、昨年創業 101 年を迎えた。「創業当時は、仏具、茶道具、花器を中心に、くわえて近年はテーブルウェアやインテリア雑貨、照明器具や建築金物など」⁴¹を手掛けている。近年は錫の抗菌作用を活かした医療器具の開発にも乗り出し、その活躍はますます目覚ましいものとなっている。

同社は、平成 29 (2017) 年 4 月 27 日に社屋を高岡市オフィスパークへと移転させた(写真 19)。その目的は、「規模を拡大し、製造・販売・物流部門を集約することにより生産効率の向上を目指すこと、また北陸新幹線、高岡砺波スマートインター開通により、『産業観光』に力を入れ」ることの二つとなっている⁴²。新社屋の敷地は 4,000 坪にも及び、そこでは年間 5 万人以上の受け入れを目指し態勢が整えられた。驚くことに、同社はこの年間目標を



『新社屋オープンのご案内 - 株式会社 能作 | NOUSAKU CORPORATION』より
(www.nousaku.co.jp/main/news/04102017/) 2018/3/1 閲覧

写真 19 施設外観

⁴¹ 『株式会社 能作 | NOUSAKU CORPORATION』
(www.nousaku.co.jp/main/company/) 2018/3/1 閲覧

⁴² 株式会社能作 取締役兼産業観光部部长 能作千春氏の提供資料より

五ヶ月余りで達成した⁴³。

同社が産業観光事業に取り組む目的は、①地域を代表する会社となり、産業観光に注力し地方創生につなげる。②県内観光のハブ的な役割を果たす。③富山県内で産業観光に取り組む企業が今後増えるよう、轍をつける。④地元の子供たちに地域の素晴らしさを知ってもらい、地域と日本を愛する子供達を増やすの四つであり、以下のとおり、五つの産業観光事業もそれらにのってプランニング・運用されている⁴⁴。

① 見学 NOUSAKU TOUR

社屋内にある工場の内部に実際に入り、社員のガイドを受けながら職人と同じ目線で見学を行う。音・熱・匂いなど五感でものづくりを体感することで、職人の技術の奥域をリアルに感じ取ってもらうことが狙いである。

② 体験 NOUSAKU LAB

錫の鋳物制作体験を社屋内の専用スペースを使って行う。制作できる作品の種類や価格、所要時間などは以下の表のとおりである。

表 12 体験メニュー一覧

制作物	価格	所要時間
ぐい呑 小鉢 トレー	3,500 円 (2018 年 4 月 1 日より 4,000 円に改定)	90 分
箸置き 昆虫チャーム	2,000 円 (2018 年 4 月 1 日より 2,500 円に改定)	90 分
ペーパーウェイト	中学生以上 800 円 (2018 年 4 月 1 日より 1,000 円に改定) 小学生 500 円 (改定なし)	30 分

また、受け入れ人数は 1 人からでも受け入れ可能となっている。なお、ペーパーウェイトの体験料金は中学生以上 800 円で、小学生は 500 円となっている。これは目的④で述べたように、産業観光を通してものづくりを知ってもらいたい 1 番のターゲットが子供であることからきている。

⁴³ 『能作新社屋、来場 5 万人 高岡、5 カ月余りで目標達成
富山県のニュース | 北國新聞社』 2018/3/1 閲覧
(www.hokkoku.co.jp/subpage/T20171003203.html)

⁴⁴ 株式会社能作 取締役兼産業観光部部長 能作千春氏の提供資料より

体験者は講師とともに砂を使用した生型鑄造の型作りを行い、講師が鑄造し終わった製品の磨き作業や刻印などを自由に行うことができる。ただ、ペーパーウェイトについては仕上げ作業が体験に含まれておらず、その代わりに原型にシールを貼ってデコレーションすることでオリジナルの作品を作ることができる。(下写真 20、21⁴⁵⁾)



写真 20 トレー



写真 21 ペーパーウェイト

③カフェ IMONO KICHEN

施設内に併設されたカフェスペースでは、実際に能作の食器で食事を提供している。セルフ形式のお冷グラスも錫できており、使い心地を体感することができる。またそのメニューにも、砺波市の名産である大門素麺などをはじめとした様々な富山県のもが使用されている。加えて、団体客向けのお弁当も販売されている。

④ショップ FACTORY SHOP

こちらでは新社屋限定商品が充実しており、お土産品としてオリジナル T シャツやキーホルダーやアクセサリなど低価格商品も新たに開発された。

⑤観光案内 TOYAMA DOORS

こちらには①富山県観光カードと②富山県プロジェクションマッピングの 2 つの取り組みがある。まず①についてだが、こちらは同社の従業員にアンケートを実施し、富山県内(200 箇所以上)のおすすめのスポットや飲食店に取材に行き、おすすめ内容を盛り込んだ観光カードとなっている。②は富山県型のテーブルに富山県の紹介映像を投影したもので、富山の四季や名所、名物などを見ることができる。

このように、富山県全体をけん引していくかのように産業観光事業を率先して行っている能作だが、課題が存在する。取締役兼産業観光部部長の能作千春氏によると、産業観光事業からは収益があまり得られていない。そもそも工場見学が無料であるうえに、来場した人々が必ずしも全員商品を購入したり、カフェを利用したりなど施設内で消費活動を行うわけではないからである。そのため、鑄物制作体験の料金の値上げも社内では検討されてい

⁴⁵ 『株式会社 能作 | NOUSAKU CORPORATION』(www.nousaku.co.jp/main/tourism/nousaku_lab/)

る。同氏は第二の課題として、産業観光に対する社内の理解・意識の差も挙げたが、その原因の一つに収益性の低さがあると指摘している。

地域振興事業において幅広く言えることであるが、事業は収益を求めないボランティアを増すごとに持続性が低くなりがちである。やはり「産業観光で儲かる仕組み」を作り出すことが、産地全体で共通して言える課題となってくるだろう。

2-2-2 はんぶんこの体験事例

HANBUNKO は、「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された山町筋土蔵作り商家のひとつ、江戸時代から続く金七金物店の空店舗に開かれたショップ・ギャラリーである。はんぶんこ(HANBUNKO)という名は、使う・知る・つくるをテーマに、モノへの思いをはんぶんこ＝共有する場所という意味をもってつけられた。そのテーマにそって店内には、手仕事で作られた日用品の展示、販売を行う「使う」スペース、倉庫として使われていた蔵を再利用した図書室兼自習スペースとなっている「知る」スペース、そして実際に伝統工芸品の製作体験ができる「つくる」スペースがある。また、はんぶんこはショップでの販売や体験だけでなく、伝統工芸品の産業観光の企画などに多く携わっている⁴⁶。

◇HANBUNKO の産業観光の取り組み

① 体験

錫のぐい呑みをつくる鑄造体験(4,000 円、120 分～)と螺鈿細工体験(4,500 円、90 分～)が現在行われている。高岡銅器の生型鑄造という技法を使い錫のぐい呑みを制作することができる。制作後すぐに持ち帰ることができる。螺鈿細工体験は、弁当箱と手鏡のいずれかを選ぶことができる(写真 22)。螺鈿細工とは、貝殻の内側、虹色光沢を持った真珠層の部分を削り出した板状の素材を、漆地や木地の彫刻された表面に貼り、その上に塗り込む手法であり、高岡漆器の伝統的な技法のひとつである。この体験では、アワビの貝を薄く切ったモノをデザインに合わせて切り取り、それをニカワで貼り付ける体験をする。(写真 23)体験したものは高岡市の漆器工房に仕上げてもらい二



写真 22 鑄造体験の様子



写真 23 螺鈿細工体験の様子

⁴⁶ 『About us|はんぶんこ 富山県高岡市のモノづくりプラットフォーム』より
(http://hanbunko.org/about_us)

週間～一ヶ月後に手元に届く。鑄造体験、螺鈿細工体験ともに事前予約で土曜、日曜、祝日に2～6人を受け入れている。以前は、予約なしの短時間で作れるFLATというブローチの製作体験(1,500円)も実施していたが、現在は人手不足のため行われていない⁴⁷。

体験人数は年間約1,000人であり女性が多く、3分の2は県外から体験に訪れる。また、体験の中でも鑄造体験が九割を占めており、すぐに持ち帰ることができるということが鑄造体験を選ぶ一つの要因となっている⁴⁸。

② たかおか x 飛騨 CRAFT SAKE 2 DAYS

これは、平成29(2017)年8月26日～8月27日に実施された富山県高岡市(株)HNBUNKOと岐阜県飛騨市の(株)飛騨の森でクマは踊る／FabCafe Hida主催の体験プログラムである。参加費は4万円、限定10名で募集された。高岡には鑄造、飛騨には木工というようなその土地特有のモノづくり文化がある。この体験プログラムでは、高岡市で錫のぐい呑みと箸置きをつくり、飛騨市で天然木のお箸とトレイをつかって晩酌セットを完成させる。それぞれの土地のモノづくり

表13 たかおか x 飛騨 CRAFT SAKE 2 DAYS スケジュール

1日目	13:00	受付&オリエンテーション
	13:30	①錫のぐい呑みづくり(鑄造) ②錫の箸置きづくり(鑄造)
2日目	16:30	ぐい呑みと箸置きの磨きを行い仕上げ
	17:00	食事:土蔵造りの蔵で懇親会自ら作ったぐい呑みで富山の地酒と料理を食べる
	19:00	高岡山町筋散策:開催当日、土蔵造りフェスタ開催
	21:00	就寝@ほんまちの家:町家をリノベーションしたゲストハウス
2日目	13:00	受付&オリエンテーション
	13:30	①お箸作り:広葉樹の特徴やお箸の文化、自分の手に最適な長さなどの講義からスタートし、カンナを使い、本格的な木工であなただけのオリジナルの箸を製作
	15:30	②トレイづくり:天然広葉樹のトレイに自然素材の塗装で仕上げ
	16:00	地元2大酒蔵の地酒試飲と飛騨古川町歩き
	18:00	食事:100年以上の歴史を持つ古民家、FabCafe Hidaで飛騨の素材を使った料理。完成した晩酌セットをつかって地酒の飲み比べ
	21:00	就寝@FabCafe Hida

『たかおか x 飛騨 CRAFT SAKE 2 DAYS』より

[<https://fabcafe.com/hida/events/takaokahidacraftsakedays>]

と、美味しい地酒と料理を堪能し文化を味わい尽くす「作る + 巡る + 食べる + 泊まる」の贅を尽くした一挙体験プログラムである⁴⁹実際に参加した人数は3名であった。参加費が一見高額に見えるが、実際のプログラムの内容をみると満足できる相応な金額であるため今後参加者の増加を期待したい⁵⁰。

⁴⁷ 『Workshop|はんぶんこ 富山県高岡市のモノづくりプラットフォーム』より
(<http://hanbunko.org/category/workshop>)

⁴⁸ 2017年11月17日 株式会社はんぶんこ 東海裕慎氏へのヒアリングより

⁴⁹ 『たかおか x 飛騨 CRAFT SAKE 2 DAYS』

(<https://fabcafe.com/hida/events/takaokahidacraftsakedays>)

⁵⁰ 2017年11月17日 株式会社はんぶんこ 東海裕慎氏へのヒアリングより

2-2-3 高岡市工房見学の事例

富山県高岡市は前田利長公によって開町されて以来ものづくりの町として発展し、現在は伝統産業の町として「クラフト」という概念に目をつけ、クラフトに関するイベントの開催やオープンファクトリーなどのさまざまな取り組みを行っている。ここでは実際の取り組みの例を三つ取り上げる。

①高岡クラフト市場街

高岡クラフト市場街は、富山県高岡市の中心市街地において、左記の「見る・買う・体験する・食べる」ことができるクラフトに関するイベントが集約されている産官学連携事業である。

- ・高岡クラフト展（見る）
- ・作家の引き出し展（購入する）
- ・クラフトツーリズム（体験する）
- ・クラフトの台所（食べる）

高岡のものづくりを他の地域のものづくりと比較した際、「コレが有名」といったものがないことから、目に見える「もの」ではなく「わざ」の重要性に着目し、そのわざの持ち主である高岡伝統産業青年会（通称デンサン）をキーパーソンとしている。また、高岡というまちがかつては多くの行政区画に分かれており、そのため多くのイベントが存在していることから運営主体のモチベーション保持が難しい中で、イベントそのものではなくそこから生まれるにぎわいを重視し、かつ運営のモチベーションを維持するために「工芸・クラフト」を軸にイベントを集約してみてもどうか、という考えが生まれたことが始まりであるという。「高岡のブランディング」と「まちなかの恒常的なにぎわい」を作ることを目的としている。

毎年秋ごろに開催されており、平成 29（2017）年は9月22日～24日の三日間にかけて開催された。平成 29（2017）年の開催を含め六回開催されており、市からの助成金を受けるのは二年目である。産官学連携事業ということで、富山大学芸術文化学部のプロジェクト授業として学生が企画・運営に参加している。平成 29（2017）年は運営体制の変化など、さまざまな理由により、「工芸都市高岡 2017 クラフト展」、「高岡クラフト市場街」、「金屋町楽市 in さまのこ」、「銅器団地オープンファクトリー」の四つのイベントを「クラフト系 4 大イベント」と称し同時開催し、山町筋の「山町ヴァレー」がイベントの中心になるように構成された。これまで開催時期が異なっていたそれぞれのイベントのにぎわいが他のイベントのにぎわいにつながるという相乗効果をねらったものである。毎年さまざまな改良や変化がみられる試みだが、今後も継続的な開催が期待される⁵¹。

②高岡クラフトツーリズム

「クラフトツーリズム」は「ものづくり」を意味する「クラフト」と「旅行」を意味する「ツ

⁵¹ 2017年11月30日 「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業 地域づくりセミナー： 富山大学 芸術文化学部 准教授・高岡クラフト市場街実行員会 副実行委員長 有田行男氏の講演より

ーリズム」をかけた造語である。高岡クラフトツーリズムは、高岡銅器や高岡漆器の職人たちが自ら案内をする工房見学だけでなく、工房内にイートインコーナーを設置し職人の作った器で地場産品を食べるなどの体験ができる高岡伝統産業青年会の企画によるイベントである。昨年 2017（平成 29 年）年は 9 月 23 日に開催された。具体的な日程は表 14 のとおりである。

表 14 平成 29（2017）年高岡クラフトツーリズム実施内容

日時	平成 29（2017）年 9 月 23 日（土）9:30－17:30（集合 JR 北陸新幹線新高岡駅、解散 新高岡駅または JR・万葉線・あいの風とやま鉄道高岡駅）
会場	富山県高岡市内（コースにより異なる）
内容	<p>コース A：スタンダード高岡コース～鋳物から漆器まで～</p> <p>【原型】嶋モデリング</p> <p>【鋳造】小島製作所</p> <p>【着色】モメンタムファクトリー・Orii</p> <p>【販売】漆器くにもと</p> <p>【漆】武蔵川工房</p> <p>コース B：マニアック高岡コース～高岡をもっと知りたくなったあなたに～</p> <p>【研磨】迅福堂（尾崎迅）</p> <p>【金工作家】atelier 山道（青木有理子）</p> <p>【着色】色政</p> <p>【漆】アルベキ社</p> <p>【販売】大寺幸八郎商店（金屋町）</p> <p>コース C：1 日職人コース～能作の工場見学と真鍮の鋳物体験！</p> <p>【鋳造】能作</p>
費用	<p>コース A：9,000 円（昼食含む）</p> <p>コース B：9,000 円（昼食含む）</p> <p>コース C：12,000 円（昼食・体験材料費含む）</p>

高岡クラフトツーリズム HP より 2018 年 3 月 9 日閲覧（<http://craft-tourism.jp/>）

③銅器団地オープンファクトリー

銅器団地オープンファクトリーとは、富山県高岡市の伝統工芸である「高岡銅器」の一大生産拠点である「高岡銅器団地」にて工場を開放し、参加者に鋳物、加工、着色、研磨、メッキなど製品の成形から最終仕上げまで、普段は見ることができない多彩な技術や工場を

隅々まで見て感じて、楽しんでもらうというものである。イベントのコンセプトは「歩いて回れる、大人も楽しい社会見学。」で、ものづくりに興味があるすべての人に向け、高岡がものづくりの街であること、高岡銅器団地には「個性のあるものづくり企業がある」ことを伝え、ファンになってもらうことを目的としている⁵²。平成 29（2017）年は 9 月 22 日、23 日の二日にわたって開催され、参加企業は 21 社 23 工場、来場者数は 511 人だったという。平成 29（2017）年の開催が初めての試みであり、今後 3 年間は継続して開催する予定である。今年度は予想より来場者数が多かったが、まずは知ってもらうことがスタートであるため印象に残る、記憶に残るようなものにし、今後はスタッフの増員やショールームを作るなどの改善を行い、売り上げに結びつけることを目標としており、今後の取り組みが期待される。観光産業を実施したことによって、職人が仕事に集中できないなどのデメリットもあるが、人に見られるという意識で工場がきれいに保たれる、職人の話すスキルが上がるなどのメリットもあるという。また、産業観光への取り組みとして株式会社 JTB と連携した旅行企画を 2015（平成 27）年より開始しており、その内容は 2 時間で 32 社中の二ヶ所の工房を見学するというものであり、年間 20～30 団体、約 300 人の参加があった⁵³。

⁵² 高岡銅器団地協同組合 未来を考える委員会 HP 2018 年 3 月 9 日閲覧
(<https://doukinomirai.jp/event/>)

⁵³ 2018 年 2 月 9 日 高岡銅器団地組合 事務局 中山晃氏 ヒアリング調査による

2-3 小括

呉西地区におけるニューツーリズムの取り組みについて、第2章1節の全国のニューツーリズムの事例などを通して読み取れることとしては、ニューツーリズムを行うためにはそれぞれの地域の特色をしっかりと把握し、そこからどのようなものに観光資源としての価値を見出すのが重要ということである。また、その見出した観光資源の活用方法について、地域自体がもつ強み・弱みをしっかりと分析・把握し、他地域や他産業での取り組みを参考にしながら、その地域に合ったやり方を見つける必要がある。

さらに2節以降では、呉西地区の特に高岡で行われているニューツーリズムの事例を取り上げた。ものづくりの街として産業観光を行う場合、分業制が確立されてきた小規模な産地では、ある一部の工程だけを見ても全体像が見えにくく、またどこか一箇所の事業所に負担が集中するのも好ましくない。高岡のように生産者同士・職人同士のつながりの強さがあるのなら、これらを活かし、すでに行われているオープンファクトリーやクラフト系イベントなどを深化させることが求められる。しかし、産業観光の取り組みを生産者側が積極的に行っていても、収益が上がらなければモチベーションが持続しない。継続的な利益が出せるようにならなければ、いずれ地域自体が消耗しきってしまう。地域全体に利益があるよう考えることは大変難しいが、高岡ではすでに積極的な生産者たちによるさまざまな取り組みが行われているため、既存の取り組みをどう改善していくのか、あるいは新しい取り組みへどうつなげていくのか、継続して考えていく必要があるだろう。

第3章 呉西地区の伝統的工芸品産地への具体的提案

3-1 高岡漆器産地

3-1-1 現状と課題

産地全体の課題として、従事者数の減少や生産額の減少などが共通してみられる。また、現代のライフスタイルに適合した商品の開発や流通・販売形態の確保、人材育成のためのシステムが十分でないことも課題として挙げられる。その中でも一番の課題は、継続的に売れる商品や提供する側に利益のあるサービスの開発である。そういった継続的な仕事が確保されていなければ、人材を呼び込むことが困難になる。人手が足りなければそれぞれが今ある仕事をこなすことに手いっぱいになってしまい、結果として体験メニューなどの他産業への試みや、新しい人材育成のための時間をつくるのが難しくなるという問題につながっていると言える。

強み

- ・生産者が新しい取り組みに意欲的であること
- ・満足度の高い体験メニュー・工房見学

弱み

- ・人手不足
- ・従業者の高齢化
- ・生産額の減少
- ・ヒット商品が少ない

機会

- ・クラフトイベントでの展示・販売・工房見学・体験メニュー
- ・ものづくり・デザイン科による小中学生への啓発

脅威

- ・高岡銅器に比べて知名度が低い
- ・漆器＝高価というイメージ
- ・ライフスタイルの変化（漆器を使う場面の減少）

これらのことから、この産地の課題を解決する方策は、**継続的に売れる商品・サービスの開発**だと考える。

しかし、ひとえに新商品の開発や体験などのサービスを行うにあたっては、分業制という生産体制や漆・木地など材料の高騰の問題がある。螺鈿細工などの体験は仕上がりに時間のかからない塗料を使うことで格段に時間短縮ができ、当日持ち帰りすることも可能になったという良い面もあるが、人手が足りないため、大人数を一度に受け入れる体制はない。体験に必要な道具や材料などをどこまでを低コストのもので賄うか、また、付加価値をどのようにつけるのかをよく考えなければならない。

3-1-2 具体的提案

事業名：ひとそろいアクセサリ体験	
ターゲット	<ul style="list-style-type: none"> ・金銭に余裕のある 30 代以降の女性 ・外国人観光客
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統工芸を深く楽しめる体験メニューや工房見学を通し、高岡のものづくりへのイメージアップ（知名度向上・親しみやすさ向上）を促す ・高岡銅器との連携 ・他産業、既存のイベントとの連携
実施場所	すでに高岡漆器・高岡銅器の体験メニューを行っている、または新しく行いたいという工房。
<p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業実施期間を毎年夏（8月～9月）などに定め、工房見学や螺鈿細工や銅器（錫）でアクセサリを作る体験メニューを行う。一定数（三種類ほど）の体験メニューに参加するとこの事業限定デザインの特別なラッピング（箱や紙袋、巾着など）で包装される。三種類体験すると「高岡のものでひとそろい」のアクセサリセットになる。 ・数種類のメニューが用意されており、工房ごとに作れるアクセサリの種類やデザインが違う。体験者には共通のスタンプカードを渡し、体験メニュー一つごとにスタンプを一つ押す。スタンプ欄は3個のみ。2枚目のスタンプカードを発 	
	
<p>体験で作れるアクセサリのイメージ</p>	

<p>行するときは体験メニューもしくは特定の商品への一定金額の値引きが適用される。</p> <p>・アクセサリ体験は一種類からでも体験できる。(例：一種類 3,500 円ほど、三種類体験すると 10,000 円といった具合に、何種類か体験するとお得になる) 体験料金には講師料も含まれており、従来の体験メニューの価格より少し高めに設定する。</p>	
<p>期待される効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アクセサリという身近なものを作る体験でありながらも、高岡のものづくりへの興味や理解を深めることができ、さらに PR にもつながる。 ・熱心な高岡のファンを増やすことでリピーターになってもらう。 ・観光シーズンやクラフトイベントが行われている時期などにぶつけて行うことで、工房見学やまち巡りへ誘導し、高岡の回遊性向上や消費活動を促す。
<p>実施主体や予想される負担</p>	<p><実施主体> 事業への参加者などからなる運営・実行委員会。</p> <p><予想される負担></p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業のサイトや限定パッケージなどの魅力あるデザインを作る必要がある。優秀なデザイナーの確保。 ・一か所に人が集中してしまわないような均等なメニュー配分を考える必要がある。 ・クラフトイベントがどのように行われるのかその年ごとに不確定であること。

3-2 高岡銅器産地

3-2-1 現状と課題

高岡銅器は、販売額が平成2年をピークに現在では3分の1に減少、従事者数もそれに伴って高齢化し減少している。しかし、新しい商品開発など販路開拓など特に製造業者の活躍もあり販売額はここ最近横ばいになってきている。行政や各企業での新商品の開発や産業観光への取り組みも見られ、新たな取り組みに対して積極的であることがうかがえる。しかし、産業観光等の完全な仕組みはできておらず大きな利益が得られていないのが課題となっている。

強み

- ・新たな取り組みに積極的
- ・若い職人が元気であること

弱み

- ・後継者不足
- ・職人の高齢化

機会

- ・伝統工芸の見直し
- ・県内の産業観光活動の高まり
- ・ものづくり・デザイン科

脅威

- ・安価な代替品の流通
- ・高岡市の財政難

行政や各企業での新商品の開発や産業観光への取り組みも見られ、新たな取り組みに対して積極的であることがうかがえる。しかし、産業観光等の完全な仕組みはできておらず大きな利益が得られていない。高岡市は宿泊施設、観光地へのアクセスツールも少なく、さらに家族で経営している工場では大人数を受け入れることが難しい。つまり、産業観光では少人数であるからこそできる満足度の高い観光産業などの仕組みを作る必要がある。そして、高岡銅器のリピーターとなるようなコアなファンを獲得するべきである。

これらのことから、この産地の課題を解決する方策は、**高岡市のコアなファンを獲得すること**だと考える。

3-2-2 具体的提案

事業名：手作りギフト体験	
ターゲット	<ul style="list-style-type: none"> ・手作りプレゼントを贈りたい人
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・高岡銅器で贈り物を作ってもらふことによって、印象に残るような体験にする。 ・県内の伝統工芸品との連携を強める。
実施場所	<ul style="list-style-type: none"> ・高岡市地場産業センターなどの体験施設。 ・井波彫刻の体験施設
<p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原型づくりからオリジナルのものを作る。原型づくりは、発泡スチロールなど(ビー玉などを埋め込むこともできる)で原型をつくる方法と井波彫刻で原型を作る方法が選べる。ラッピングやメッセージカードは五箇山和紙などを使用しここでしか作れない世界に一つだけのギフトを作る。 ・作ったものは持ち帰ることもできるが、その場で送り主に配送することもできる。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>発泡スチロールの原型製作作品の例</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>五箇山和紙 ラッピング例(五箇山和紙の里便り [http://gazoo.com/my/sites/0001452614/GOKAYAMA_MURA003/Lists/Posts/Posts.aspx?PostID=1452614])</p> </div> </div>	
期待される効果	<ul style="list-style-type: none"> ・体験を通して高岡銅器の作る大変さや良さなど価値を知ってもらうことができる。 ・ギフトを自分で作ることによって高岡銅器の体験が強く印象に残り、購入のきっかけになる。 ・ギフトとして贈ってもらふことによって知名度を上げることにつながる。 ・富山県の伝統工芸品に幅広く触れることが出来る。 ・高岡市のコアなファンを獲得する。
実施主体や予想される負担	<ul style="list-style-type: none"> ・一人 6,000 円～(内井波彫刻体験 2,500 円、ラッピング(五箇山和紙など)800 円) ・他の伝統工芸品との連携や宅配サービスとの連携も必要となる。

3-3 庄川挽物木地産地

3-3-1 現状と課題

庄川木工協同組合に加盟する企業と従業者数は年々減少傾向にあり、現在の加盟企業数は13社、従業者数は16人となっている。(組合に加盟していない企業も存在する。)同組合は技術伝承のためにDVDなどの資料を製作しているものの、その他の後継者育成のための取り組みは特に行われていないというのが現状である。

また、それに伴って産業観光(製作体験・工房見学など)を行う施設も減少している。しかし、庄川挽物木地自体は近年NHKやローカルテレビ番組にも取り上げられるなど、注目が高まっている状態だと言える。加えて、庄川という地域でも道の駅が改装オープンし、周辺に新しい温泉施設ができるなど、従来の温泉や鮎料理だけでなく地域全体としての観光的魅力が上がってきているように思える。しかし、注目が高まり観光客が訪れてもその対応を職人が十分にできる環境にあるとは言えず、この機会を活かしきれていない印象を受ける。

強み

- ・木目の美しさ
- ・周辺地域の観光的魅力
- ・製品の一貫制作が可能
- ・体験道具は持ち運び可能

弱み

- ・担い手の不足
- ・職人の高齢化
- ・ネット環境への順応不足
- ・漆器になると庄川産だと分かりにくい

機会

- ・メディア露出の増加
- ・周辺地域の再開発
- ・伝統工芸文化への見直し
- ・県内の産業観光活動の高まり

脅威

- ・安価な代替品の流通
- ・他産地への人材集中

庄川で生産される挽物木地の約六割近くが、主に県外の漆器産地へと出荷され「その地の漆器」として各地で販売されている。中には木地が庄川産であることを明記してくれる問屋もあるそうだが、客の混乱を防ぐため明記しない問屋のほうが多い。職人の数も減少し、生産できる木地の量も減っているなか、「庄川挽物木地」として市場に出すことのできない製品があることはやはりもったいないと感じざるを得ない。そこで、庄川挽物木地として売り出せる新製品の開発をより推し進めていくことも重要な課題の一つとなるだろう。

しかし、何をやるにしてもまず人材がいなければ何も始められない。たとえば、外部からコーディネーターなどを誘致し、庄川挽物木地の強みや機会を活かした宣伝を行い、ニーズを生み出したとする。しかし、そのニーズの分だけ製品を生産できる環境が整っていなければいけない。

そうすると、人手が集まるような環境づくり(庄川という地域の魅力発信、ある程度の生活の保障、訓練制度の明確化など)を庄川挽物木地の宣伝と並行して行っていく必要があるだろう。これについても、職人だけで実行するのは体力的に難しいこともあり、市とのより密接な連携・外部から専門家やコーディネーターなどを呼ぶことを視野に入れる必要もあると考えられる。

これらのことから、この産地の課題を解決する方策は、**人材が集まる環境づくりとその宣伝**だと考える。

3-3-2 具体的提案

事業名：庄川ひきもの職人図鑑	
ターゲット	<ul style="list-style-type: none"> ① 全国の工芸系高校や大学の学生 ② 庄川への観光客
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・庄川挽物木地そのものと、産地が後継者を募集していることを①のターゲット層に認知してもらい、人材の集まる環境づくりの下地を整えるため。 ・直接交流する機会の少ない職人たちを、誰にでも身近に感じてもらうため。
実施場所	<ul style="list-style-type: none"> ・フリーペーパーとして全国の工芸系高校や大学に配布 ・道の駅庄川や庄川水記念館・新高岡駅などにも観光客向けに設置予定
<p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・庄川挽物木地では職人の数も激減し、それに伴って工房見学や製作体験などを通して職人たちと実際に触れ合える機会も少なくなっている。それを改善するため、実際に現地まで行って交流しないと得られないような情報を簡単に得られる手段としてフリーペーパーを作る。(内容データは庄川木工協同組合の公式サイトにも掲載予定) ・発行部数にもし余裕があれば近隣の小中学校に配布することも予定する。 また続編として、夏休みなどの長期休暇の際に行う短期の技術インターン情報を重点的に掲載した冊子を①のターゲット向けに製作することも効果的かと思われる。 ・フリーペーパーの内容としては、以下を予定する。 <ul style="list-style-type: none"> ① 庄川挽物木地について(どういったものが作られているかなどの紹介) ② 庄川木工協同組合に加盟する職人の写真・プロフィールと工房の雇用情報 ③ 庄川地域についての簡単な観光情報(近くの温泉やグルメなど) 	
期待される効果	<ul style="list-style-type: none"> ・後継者となる可能性が比較的高い人材たちへ、ピンポイントに情報を届けることができる。 ・観光客にも簡単に職人を身近に感じてもらえる。
実施主体や予想される負担	<ul style="list-style-type: none"> ・冊子の製作は「株式会社さくらノート」に依頼する。 ・冊子の製作費・送料は市の補助金や冊子に掲載する店舗などからの協賛金で賄う。

事業名：お風呂で遊べる庄川挽物おもちゃづくり体験	
ターゲット	① 子供のいる家族 ② 孫を持つ高齢者
目的	・職人側の負担を抑えた製作体験を開発するため。 ・周辺地域をまきこんで、地域のリピーターを生み出すため。
実施場所	体験の場は庄川水記念館内の庄川特産館を予定する。 おもちゃで遊べる場所として、周辺の温泉施設 6 つにも協力を要請する予定である。 ・庄川温泉風流味道座敷 ゆめつづり ・鳥越の宿 三楽園 ・庄川清流温泉 越中庄川荘 ・人肌の宿 川金 ・柳湯 ・ゆずの郷 やまぶき(下二つは銭湯)
<p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 28(2016)年 5 月、『ミシュランガイド富山・石川(金沢)2016 特別版』が発行されたが、その中で庄川温泉郷内の旅館 4 軒が掲載された。また、翌年には健康福祉施設『ゆずの郷 やまぶき』がオープンするなど、庄川温泉郷の観光的魅力が上がっている。これを利用し、周辺温泉施設との提携が可能な体験を提案する。 ・実施期間は、子供の日の周辺となる 5 月 3,4 日の二日間で人数を限定して行う。 ・製作物はお風呂で遊べる木のおもちゃ(形は平たい鏡餅のような感じ)。これを様々な木材(トチ、ケヤキ、マツ、サクラ、イチョウ、ヒノキなど)で直径 7~15cm とサイズの違うものを十個作る。また、これらすべてを収納できる大きなお盆も制作してもらう。また、はんだごてでそれぞれに使用した樹木の名前と好きな顔などを描く。 <p>遊び方は、お風呂などの水面におもちゃをいくつ積み上げられるか親子や兄弟でバトルする形式を想定する。ターン制で、先にタワーを崩したほうの負けという単純なシステム。制作の流れとしては、まず好きな木材を選んでもらってから、大人が形を削りだして、子供には仕上げの磨きを手作業でもってもらう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・完成したら、おもちゃをもって各温泉へ行ってもらうように勧める。各温泉ではさらにサイズの大きいタイプのおもちゃを置いてあるため、家庭よりも大規模なバトルができる。また他の子供達とバトルを通じた交流などもできる。 	

・製品は白木のままで渡すが、その理由としては以下の三点がある。

- ① 木そのものの質感に触れてもらうため。
- ② お風呂上りには「きちんとおもちゃを拭いてからお盆に片づける」というプロセスを踏んでもらうことで、幼いころから木の製品の扱い方や特性について学んでもらうため。
- ③ 制作してすぐにお客様へ製品をお渡しするため。



遊ぶ様子のイメージ図

<p>期待される効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子供にも早いうちから複数の木材に実際に触れてもらうことで、将来的に人材となりうる存在を増やす。 ・お風呂でのおもちゃ遊びは子供の思い出づくりに効果的であると考えられ、制作体験がより印象深いものになる可能性がある。
<p>実施主体や予想される負担</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・実施主体は庄川木工協同組合で、庄川木工まつりと合わせて行うことを想定する。 ・体験料金：一組につきおもちゃ十個、収納用お盆一個セットで4,000円

3-4 越中和紙産地（五箇山）

3-4-1 現状と課題

現状としては、五箇山の3つの事業所において生産、体験などが行われている。その中の一つ、「五箇山和紙の里」では、年々来訪客は増えており、売り上げも右肩上がりである。客層は、半数以上が海外から、交通の便が悪いということからツアーで訪れる者がほとんどだという。海外からの客が多いということもあり、リピーターについては多くない。体験としては、どの事業所も紙漉き体験を主に行っている。紙漉き体験は、値段も手ごろで15分程度で体験できることから、誰でも気軽に体験できる内容となっている。また、五箇山和紙の新ブランド「FIVE」を立ち上げ、積極的に首都圏や海外でも展示会を行うなど、活動的で元気のある産業に思える。

また、平成26年（2014年）には和紙が無形文化遺産に登録されている。さらに、五箇山自体が白川郷と合わせて合掌造り集落として世界遺産に登録されているなど観光客からの注目は現在大いに高まっていると言える。その効果もありフリーペーパーや旅行雑誌をはじめとした媒体やテレビからの取材も多く、情報は自ら発信せずとも伝わるような状況で、世界遺産巡りのツアーのなかにも多く組み込まれている。

強み

- ・新ブランドの存在
- ・海外での活躍の可能性
- ・気軽にできる体験

弱み

- ・人手不足
- ・従業者の高齢化
- ・生産能力の低さ

機会

- ・ツアー客の増加
- ・多くの海外客
- ・和紙の無形文化遺産への登録

脅威

- ・五箇山を知らない人が多い
- ・交通の便が悪い
- ・高い価値をつけにくい

しかし、課題として挙げられるのは従業者の少なさと高齢化である。作業内容の面からみても、原料を育てる農作業においては根気が必要で、若者には難しいかもしれないという声もあった。現在その作業は、80歳以上の高齢者が行っている。また、生産能力が低いこと

から在庫が作れないということも大きな課題だ。五箇山和紙の大きな特徴として、原料の生産から和紙の完成までの一連の流れをすべて自分たちで行うことがある。そのため、一つ一つの作業工程に時間が必要となり、在庫を作る余裕があまりない現状である。

脅威のなかでも挙げたが、県外の展示会に出展すると最初に「五箇山がどこにあるか」という説明からはじまるという。世界遺産の合掌造りで有名であるが、合掌造りといえば白川郷というイメージが強い。もし、五箇山の合掌造りを知っていたとしても「五箇山」という場所がどこにあるか、多くの人には知らない。まず五箇山の認知をあげることも必要である。また、紙であることから、高い価値をつけにくいということも脅威として挙げられる。作業工程に手間と時間がかかるうえ、技術も必要だが、あまり値段が高いと消費者は納得しにくいと考えられる。

これらのことから、この産地の課題を解決する方策は、**生産能力の向上**だと考える。

生産能力が向上すれば従業者一人ひとりの負担も減り余裕もできるだろう。それが実現すれば、増加する客数にも対応でき、他の脅威にも対応できるのではないだろうか。

3-4-2 具体的提案

事業名：五箇山和紙ともしび祭り	
ターゲット	① 南砺市の小学校 5 年生（指定の学校 1 校） ② 南砺市の中学校 2 年生（指定の学校 1 校） ③ 南砺市の高校生（募集）
目的	・生産能力の向上 ・五箇山全体の賑わいの創出
実施場所	・楮の栽培、紙漉き：五箇山和紙を取り扱う 3 事業所（五箇山和紙(農)、五箇山和紙の里、東中江和紙加工生産組合） ・祭り：相倉合掌造り集落

【内容】

《主な内容》

- ・3 事業所共同の畑、体験用の畑の設立
- ・楮を半年かけて栽培（隔週）
- ・和紙に関する講義（2 回）
- ・育てた楮で紙漉き
- ・新たな祭りの企画・運営

新たに 3 事業所で使用する大きな畑を開拓し、3 事業所で連携し、楮を育てる。新たな畑（ここでは共同楮畑と仮称）は、現在五箇山和紙の生産を担っている 3 事業所の中心となる位置に置くことを想定する（図 11）。その場所に、今回の体験用の畑も併設。決められた学校で、それぞれ小学 5 年、中学 2 年（1 学年 50

～70 名を想定）の年になると学習プログラムとして隔週で授業時間を使用して行う。南砺市内の学校から共同楮畑まで車でおよそ 40 分強かかることから、毎週の活動は困難と判断し、隔週開講とした。和紙に携わる、楮の栽培に長けた職員から指南を受けながら、学生たちが四月から十一月にかけて楮を育てる。楮を育てるなかで、和紙の知識をつけるための簡単な講義も 2 回行う。



図 11 五箇山和紙の各事業所と畑となる予定地

う。学生が栽培にかかわる頻度としては授業の時間内に限られるが、それだけでは足りない。そこで楮栽培の中心となる学生委員会を設立し、この委員会委員を中心として栽培を行う。委員のものは、学生の指揮のほか、委員会活動として授業以外でも栽培などの手伝いをする。

11月になり楮を収穫したあとは、自ら育てた楮で和紙を漉いてもらう。この漉いた和紙は祭りで提灯として使用。最後には、この提灯を使用し、「五箇山和紙ともしび祭り」として新たな祭りを開催。この祭りも学生主体で行う。学生委員は、楮栽培の中心となった委員と別に設立しても、同じメンバーで継続しても良い。学生自身で考えながら祭りのテーマの決定や運営を行う。

今回、対象者として南砺市内の高校生も含めたが、高校生は楮の栽培から祭りの運営までに完全に关わるわけではなく、祭りの広報を主に担ってもらう。主な内容としては、広告の作成、頒布、インターネットを使用した情報発信などを担当。祭りには一般客も参加することができるので、市内だけでなく、広く一般客に向けた情報発信を行う。小中学校では、1学年を対象としたが、高校生の場合は授業に組み込むことなどは難しいことから、サークルや部活、委員会などの校内の団体に声をかけ参加者を募る形をとる。もちろん、主な仕事内容が決まっているだけなので、希望すれば、高校生でも楮の栽培や祭りの運営に参加することも可能。

祭りの時期としては8月ごろになるため、使用する和紙は前年のものになる。そのため、楮の栽培から祭りまで一年半ほどの期間が必要とされる。

《年間スケジュール》



五箇山和紙ともしび祭り

南砺市内の指定の小学校5年生・中学校2年生が中心になって、企画・運営する祭り。相倉合掌造り集落で開催し、一般の人も参加することが可能。ここで使用される和紙は学生たちが楮の栽培から行って作り上げたもので、祭りを照らす提灯も学生たちの手で作られる。毎年テーマを学生実行委員で決定し、そのテーマに基づいて祭りが開催される。(例：テーマ「星降る五箇山」であれば提灯を星型にして、たくさんの星を吊るす。テーマ「絆」であれば、提灯に思い思いの絆をイメージした絵や詩を書き、その提灯を持って、参加者たちと提灯を交換、交流するなど。) テーマや祭りの内容は自由で、その年それぞれの個性がでるような内容となる。また、学生主体であるため、毎年新鮮な祭りが生まれることを期待する。

<p>期待される効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・和紙を楮から作り、自ら行う祭りに使用することで学生としては協力する力やマネジメントする力が身につく。また、自然に触れ、自然の大切さや和紙への親しみ、地元への愛を育むことができる。さらに、新たに祭りを創出することで五箇山全体の賑わいづくりにもつながる。自分の子供が一から作り上げた祭りともなれば子供たちの親族も足を運ぶ。 ・3事業所で、畑を統一し連携してその管理を行うことで生産能力の向上を期待することができる。また、畑の一部を学生に任せられるようになれば、その分従業者不足の解消にも繋がる。
<p>実施主体や予想される負担</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・畑を新たに持つ必要があるため、それは3事業所の負担になる。 ・新たな祭りとして、市にお金を負担してもらう。 ・学校側からは楮の栽培にかかる費用と講師料を負担してもらう必要がある。

3-5 井波彫刻産地

3-5-1 現状と課題

井波彫刻の体験は道の駅創遊館のくりえ〜と工房で行われているものが主であり、木のスピーカーや木のぐい呑み作り体験等の新たな体験メニューを開発し、NHK や JR の西navi といった各種メディアにも取り上げられるなど注目が高まっている。

後継者育成については、全国から弟子入りの問い合わせが来るなど、他の産地と比べると余力があり深刻な人手不足には陥っていないものの、弟子をとりたがらない職人が増えている。井波彫刻は営業、販売も問屋を介さず職人が行うため、そういった点で人手不足を産地として実感している。また、南部白雲木彫刻工房の南部白雲氏は新規顧客獲得に繋げるために井波彫刻に関心のある人と職人の交流の場が必要と考え、職人が観光客を案内するまち歩き企画「欄間ウォーク」を行ったが、コミュニケーションが苦手な職人が多く上手くいっていない。そのため、職人だけで何かを実施することは厳しい状況にある。

強み

- ・全国随一の木彫り産地
- ・後継者育成に比較的余力がある
- ・木のぐい呑み作り体験などの新しい体験メニュー

弱み

- ・生産額の減少
- ・欄間などの需要低下
- ・市場が北陸3県に偏っている
- ・伝統工芸品としての知名度の低さ

機会

- ・産業観光への注目の高まり
- ・メディアからの注目
- ・井波彫刻バスの運行
- ・フランス人観光客からの高評価

脅威

- ・交通の便が悪い
- ・宿泊施設が少ない

近年は、欄間の需要低下や市場が北陸に偏っていることなどから需要が伸び悩んでいる。生産額はピークの20億円以後減少傾向にあり、現在は約8億円と、ピーク時に比べると10億円以上も減少している。


これらのことから、この産地の課題を解決する方策は、**新たな需要となる新商品・サービスの開発**だと考える。

生産額の増加や知名度向上のために新たな需要開拓や新規顧客獲得に繋がるサービスが必要となるのではないかと考えた。

観光の視点から見ても、井波の町そのものが彫刻師の居住地で、いわば井波彫刻ありきの観光地であり、まず観光客を呼ぼうにも井波彫刻が産業として衰退してしまったら観光地としての魅力も下がってしまう。

井波は宿泊施設が少なく、瑞泉寺を見に訪れる観光客はいるものの、他の滞在時間が短いのが現状であるが、BED AND CRAFT の利用者のほとんどが海外からの観光客であることや、井波が旅行会社の視察で日本の文化や職人のルーツに関心のあるフランス人観光客から高評価を得たことから、観光の視点から見ると海外からの観光客からの需要があるのではないかと考える。そのため可能性として、井波は過度に観光地化されていないため観光サービスや土産物がまだ豊富ではなく、観光と結びつけた商品やサービスの開発も必要ではないかと考えている。

3-5-2 具体的提案

事業名：体験と井波御朱印巡りツアー	
ターゲット	<ul style="list-style-type: none"> ① 御朱印集めに興味のある 20～50 代の女性観光客 ② 瑞泉寺の参拝客
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観光客に井波彫刻のルーツである瑞泉寺を見てもらうことやまちを散策することで井波彫刻や井波の町のファンになってもらう。
実施場所	<p>体験場所はいなみ木彫りの里創遊館「くりえ〜と工房」や彫刻師の工房に協力を要請する。井波別院瑞泉寺を含む周辺の以下の 8 つの寺社を寺社巡りの対象とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 井波別院瑞泉寺 ・ 光教寺 ・ 常永寺 ・ 誓立寺 ・ 浄蓮寺 ・ 本願寺井波別院 ・ 越中国一之宮 高瀬神社 ・ 井波八幡宮
<p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 近年、パワースポット巡りで神社や寺院を訪れ、参拝の証として御朱印を拝受する人が急増している。井波別院瑞泉寺は、井波彫刻発祥の地であり見事な彫刻を見ることができる。観光客が必ず訪れるといてもいい観光拠点である。また、井波には瑞泉寺から徒歩 30 分圏内に井波八幡宮などの寺社がいくつか点在していることから、御朱印集めに向いている地域である。 <div style="text-align: center;">  <p>御朱印帖立てのイメージ</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 御朱印集めが好きな人は御朱印帳を持っている場合が多く、そういった人に向けてヒノキの御朱印帳立て作り体験を実施する。木の板と土台部分を組み立てて、台座か板に好きなように模様を彫ることができる体験にする。 	

- ・体験後は井波の社寺巡りと御朱印集めを行う。ヒノキの木くずは芳香剤としても使えることから、御朱印を3つ集めると、体験の際に出た木くずを入れる和紙の袋をプレゼントする。
- ・御朱印張を持っていない人には瑞泉寺で販売している御朱印帳を購入してもらおう。もらってもらおう



和紙の袋

<p>期待される効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客に寺社巡りで井波のまちを散策してもらい滞在時間を延ばすことによって消費活動が促される。 ・体験や瑞泉寺を見ることによって井波彫刻の道具や原材料かという基本的なことから、そのルーツや高い技術が必要とされることを知ってもらい商品の購入に繋げる。
<p>実施主体や予想される負担</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・体験の講師はくりえ〜と工房または八日町通りの彫刻師にお願いする。体験料は2,000円程を予定。 ・瑞泉寺などの各寺社には御朱印帳の記帳と袋の交換をお願いする。 ・各寺社の参拝料、御朱印の受け取り料（相場：300～500円）も別途必要。

第4章 富山型ニューツーリズムの方向性と展望

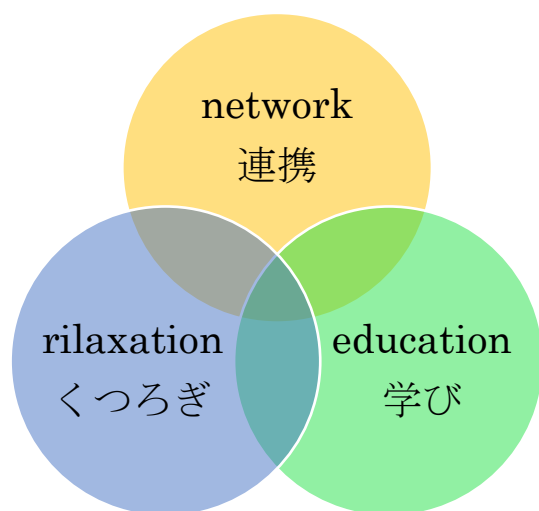


図12 富山型ニューツーリズム3つの方向性

今回の調査を通じて、富山型ニューツーリズムの三つの方向性が見いだされた。それは、①「くつろぎ - relaxation -」、②「学び - education -」、③「連携 - network -」である(図12)。なぜ富山型ニューツーリズムが、この三つの方向性なのかについて理由を述べていく。

まず、富山らしさについて考えてみると、富山には、静かで落ち着いているイメージがある。平日などは特に静かで、バスなどの公共交通機関も比較的空いている。これは、富山県民からすれば、

田舎で賑わいが少ないという印象を持つかもしれない。しかし、県外の、特に都会に住む人々からすれば、心が休まる空間となり得るのではないだろうか。都会の喧騒から逃れ、少し心を休めることのできる場所は誰にも必要で重要なものになると考える。このことから、富山型ニューツーリズムの一つの柱として「くつろぎ - relaxation -」を挙げた。

さらに、富山県は教育県としても知られ学習にも力を入れており、全国学力テストでは全国4位⁵⁴(2017年)となっている。また、富山には今回調べたような様々な伝統産業が今も残っている。教育県である富山はこれらを通じた体験プログラムを効果的に運営できるだろう。修学旅行と組み合わせることもできるのではないか。このことから、二つ目に「学び - education -」を挙げた。

最後は「連携 - network -」である。その理由は今回呉西地区の産地を見て回った中で、一つの産地のできることの限界から、連携の必要性を感じたからである。産地内のなかでも異業種、異世代などとの新しい連携ができれば、これらの産地はもう1ステップ上に上がる可能性がある。さらに他産地との連携になれば、さらに新たなシステムが生まれることを期待できる。そこで富山型ニューツーリズムの三本柱に加えた。

⁵⁴ 国立教育政策研究所 (<http://www.nier.go.jp/17chousakekkahoukoku/index.html>)

この三本柱の内容について詳述する。

① 「くつろぎ - relaxation - 」

くつろぎ、と一口にいってもリラックスできる瞬間は様々にある。富山の「心休まる空間」という強みを存分に活かして、どの産地もそれぞれの地域を散策する取り組みがすでに行われ

表 15 「各産地のくつろぎの要素」

高岡漆器	工房巡り、高岡市内散策
庄川挽物木地	温泉郷巡り
井波彫刻	寺社巡り、木彫り体験

ている(表 15 参照)。高岡漆器の提案では、一つの場所で体験をして完結してしまうのではなく、いくつかの工房を巡り、アクセサリセットを完成させる、というものを考えた。これは、工房を巡る中で、高岡の街を散策し、高岡ならではの静けさや素朴さを感じ、心を休めることができる。また、庄川挽物木地の提案では、「お風呂で遊べるおもちゃづくり体験」を挙げた。体験でおもちゃを作り、そのおもちゃを持って庄川の温泉郷で遊ぶことができるというものである。庄川の自然に触れながら温泉郷を巡ることでリラックスできるひとときを過ごせるだろう。他にも、井波彫刻の提案において、木彫り体験は、木を彫る際に出る香りにはリラックス効果があるなど、今回の提案の中には多くの「くつろぎ - relaxation - 」が含まれている。

② 「学び - education - 」

それぞれの産地で実際に伝統的なものづくりを体験することは学習だといえる。その産地を支える職人に教わりながら作りあげるものは、ただ同じ商品を買っただけでは分からないようなことなど、多くの気づきが得られる。実際に自分で伝統的なものづくりを体験すると、それらが簡単に成せることではなく、高度な技術と伝統で出来上がっていることに

表 16 「各産地の学びの要素」

高岡漆器	アクセサリ体験
高岡銅器	手作りギフト体験
庄川挽物木地	おもちゃづくり体験
越中和紙(五箇山)	紙漉き体験、楮の栽培、祭りの運営など
井波彫刻	お守りづくり体験

気づくことができる。そうすれば、その工芸品の新たな価値を知ることにつながるだろう。また、今回、越中和紙(五箇山)の提案においては、市内の学校と連携し、和紙に関する講義、祭りの運営を行うことを考えた。そのため、体験によって得られる学びのみでなく、講義や祭りの運営を通して、マネジメント力や協力することの大切さを学ぶことのできる学習プログラムであると言える。

③ 「連携 - network - 」

個々で見るとそれぞれの産地や各工房が努力していることがよく分かった。しかし、そこに他の工芸品やそれぞれの事業所同士の繋がりが見えにくいのではないかという課題も見

られる。そのため、今回の提案の中には他産地との連携のほか、様々なネットワークをもつことを提案している。それぞれ一つの事業所として、あるいは一つの工房としてしか機能していなかったものを繋げることによる新たな価値の創出を提案する。井波彫刻では、瑞泉寺が井波の観光地として大きく機

表 17「各産地の連携」

高岡漆器	高岡銅器など他産地
高岡銅器	宅配サービス
庄川挽物木地	各温泉
越中和紙（五箇山）	3 事業所、学校、行政
井波彫刻	各寺社

能してしながら、瑞泉寺を訪れたあとに井波を回る人が少なく、井波全体としては観光客の滞在時間が非常に短いという課題があった。分かりやすい導線も引かれておらず、観光客は瑞泉寺を訪れただけで満足して帰ってしまうのである。ここでも、瑞泉寺という一つの観光スポットだけでストーリーが完結していた。しかし、そこに井波彫刻のおまもりづくり体験と社寺巡りを掛け合わせた提案を行い、連携を促すことでそこに新たな価値を作り出した。このように、各産地で連携を促すことで、新たな流れを生み出すことができる。

これら三点「くつろぎ - relaxation -」、「学び - education -」、「連携 - network -」を富山型ニューツーリズムの三本柱として、今後の展開の方針とする。

おわりに

今回の調査は、平成 29 年度とやま呉西圏域調査研究事業の補助を受け、実施したものである。調査では、呉西地区の五つの国指定伝統的工芸品産地の実態を明らかにし、特に課題の表出化をはかりつつ、それらの対策を提案している。さらに対策については、富山型ニューツーリズムの三つの産地展開の方向性を示した。

多くの伝統工芸品産地は、生産額の減少や高齢化で、新たな取り組みを考える余裕もない。そこで今回の調査では、単なる現状把握ではなく、学生目線の新しい提案を通じて、産地の再生、ひいては地域の維持、発展にも寄与することを狙っている。こうした意図が成功するかどうかは、さらに時間をかけて検証することが必要であろう。また今後の展開には、学生たちの新たな提言や具体的な実践行動も不可欠だと考える。いずれにしてもこの報告書が産地再生のきっかけになることを期待する。

今回の研究事業のテーマは、以前からゼミで取り組んできたものであったが、調査研究の補助事業として採択されたのは平成 29 (2017) 年 12 月末であった。2 か月半の短い期間のなか、ゼミ生はヒアリングや視察、報告書のとりまとめに取り組んできた。平成 30 (2018) 年 1 月、2 月は豪雪にも見舞われ、ヒアリングの中止や日程変更が余儀なくされるなど想定外の出来事も発生した。時間のなさや気候条件を理由に言い訳をしているが、至らぬところは学生の能力というより教員の指導力の不足に起因する部分が多い。ご容赦いただきたい。

最後になりましたが、調査の最初の段階から関わっていただき、呉西地区のニューツーリズムの取り組みの実態の把握、企画案作成に丁寧にご助言ご指導いただいた東海裕慎様、また快くヒアリング調査にご協力いただいた行政および関連機関、事業者の皆様には厚く御礼申し上げます。

富山大学芸術文化学部
安嶋 是晴

参考文献

- ・国土交通省北陸信越運輸局（2016）『富山県における産業観光を書くとした新たな旅行需要の掘り起こしに関する調査業務 報告書』
- ・産業観光推進会議（2014）『産業観光の手法:企業と地域をどう活性化するか』学芸出版社
- ・須田寛（2009）『新産業観光』交通新聞社
- ・須田寛（2015）『産業観光—ものづくりの観光—』交通新聞社
- ・高岡市産業振興部産業企画課（2014）「特産産業の動き 平成 26 年度版」
- ・伝統的工芸品産業振興協会（2004）『全国伝統的工芸品総覧—受け継がれる日本のものづくり』ぎょうせい
- ・伝統的工芸品産業振興協会（2007）『全国伝統的工芸品総覧—受け継がれる日本のものづくり平成 18 年度版』同友館
- ・富山県広域産業観光推進委員会（2017）『富山産業観光図鑑 2017』
- ・北陸産業活性化センター（2016）『「北陸地域における産業観光の現状と課題」に関する調査研究 報告書』

伝統工芸を産業観光に

富大芸術文化学部



螺鈿の体験をしながら職人や事業者に実情を聞く富大の学生
—高岡市中央町の漆器くにもと

県西部6市に提言書 3月までに作成

富大芸術文化学部の学生が「富山型」の新しい観光事業の推進を目指し、生産額が減少している県内の伝統的工芸品産地を活用した産業観光の提言書づくりを進めている。各産地を訪ねて職人や事業者にインタビューしながら実態や課題を調査し、学生ならではの視点でモデル案や対応策を練っている。

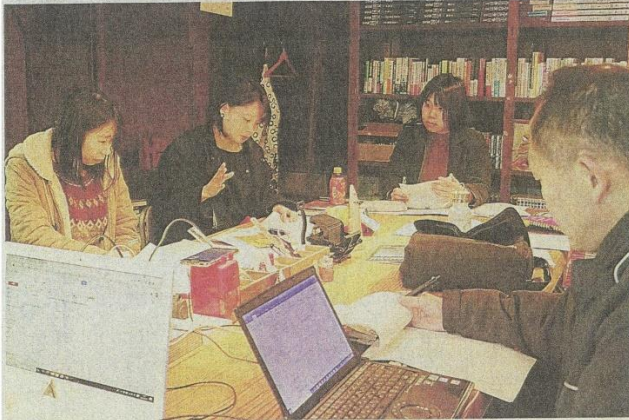
文化政策論ゼミ(安嶋晃晴講師)の学生5人が中心となり、昨年10月末時点で国の伝統的工芸品に指定されていた高岡銅器、高岡漆器、井波彫刻、越中和紙、庄川挽物木地の五つをテーマに研究している。観光振興だけでなく、産

地の再生にもつなげるのが狙いだ。

活動を進めている。4日は、学生が同市中央町の漆器くにもとで、螺鈿のアクセサリーや箸の製作体験をしながら、代表の國本耕太郎さん(46)や同市の伝統工芸士折橋治樹さん(57)に現状を聞いた。國本さんらは「体験事業を行っても職人は全くもつからない。長い目で見たファンづくりが目的」「職人はキャラクターが面白く、存在そのものが観光資源になる」といった意見を述べた。

学生の取り組みは、とやま県西圏域調査研究事業に採択されており、既に県西部で行われている産業観光の事例や全国の産地の状況なども調べ、3月15日までに提言書をまとめ、県西部6市に提出する。木下彩さん(3年)は「新しいものを生み出すだけでなく、地域にあるものを活用したまちづくりにつなげたい」と話した。

研究内容を報告する学生
—高岡市小馬出町



学生が高岡銅器や井波彫刻の産地を訪れ、生産者から聞き取った現状や観光の取り組み、課題などについて発表した。

オープンファクトリー、シェアファクトリーなど高岡銅器団地協同組合の取り組みを紹介した上坂真由さん(22)は「後継者不足など不安はあるが、若い世代が元気で積極的に挑戦していると分かったと話した。東海代表は「一つ一つの現場に足を運び、生の声を聞くことが大切だと指摘した。

安嶋晃晴講師の文化政策

論ゼミの一環で、昨年10月末時点で国の伝統的工芸品に指定されていた高岡銅

富山新聞

2018 (平成 30) 年 2 月 14 日

富大芸術文化学部

工芸観光推進へ意見交換

高岡で報告会 年度内に意見書

伝統的工芸産地を活用した観光事業の推進に取り組む富大芸術文化学部の3年生5人は13日、高岡市小馬出町のファクトリー「ほんぶんこ」で調査研究報告会を開き、同所の東海裕真代表と意見を交わした。学生は今年度中に提言書をまとめ、呉西部6市に提出する。

器、高岡漆器、井波彫刻、越中和紙、庄川挽物木地の五つをテーマに研究している。活動はとやま呉西圏域調査研究事業に採択されている。

輪島塗施設富大生が調査

呉西6市に提言へ

文化政策論を学ぶ富大芸術文化学部の3、4年生7人は18日、輪島市内を巡り、輪島塗体験がどのような形で運営されているかを調べた。学生は高岡銅器、井波彫刻などでも同じ調査を進めており、3月に内容をまとめて富山県西部6市で構成する広域団体に提言する。

7人は伝統工芸の産業観光を研究しており、各施設が提供している体験メニューの内容や、客の満足度などを聞き取っている。全国的にも有名な輪島塗が参考になると対象に加え、18日



輪島工房長屋で説明を受ける富大の学生。輪島市河井町

は呉輪島漆芸美術館などを訪れた。

輪島工房長屋では、年5千人が体験する箸の沈金、蒔絵について、学生がスタッフから説明を受けた。19日も市内の漆器店や木地を

作る工房を視察する。安嶋晃晴講師(49)野々市市IIのゼミに所属している福岡百花さん(20)は「輪島の事例を参考に、若者の目線を取り入れた斬新な提言を行いたい」と話した。

北國新聞

2018 (平成 30) 年 2 月 19 日

調査スケジュール

月	内容	フローチャート
11月	☆研究会（週1回） ☆学習会 講師：東海裕慎氏（はんぶんこ）	<pre> graph TD A[文献調査] --> B[ヒアリングなど] B --> C[提案・構想作成] C --> D[報告書作成] </pre>
12月	☆研究会（週1回） ☆学習会 講師：東海裕慎氏（はんぶんこ）	
1月	☆研究会（週1回） ☆学習会 講師：東海裕慎氏（はんぶんこ）	
2月	☆研究会（週1回） ☆先進地視察（輪島） ☆学習会2回 講師：東海裕慎氏（はんぶんこ）	
3月	☆研究会（週1回）	

ヒアリング・調査一覧

日	項目・品名	訪問先	所属・氏名
1月16日(火)	観光全般	氷見市役所	観光交流・女性応援課 課長 岡田 基義氏
1月18日(木)	庄川挽物木地	庄川特産館	庄川木工協同組合 理事長 但田 一彦氏
1月22日(月)	高岡銅器	大寺幸八郎商店	
1月25日(木)	高岡漆器 高岡銅器	高岡地場産業センター	斎藤翔太氏
1月29日(月)	井波彫刻	南部白雲彫刻工房	南部望氏
1月29日(月)	高岡漆器	武蔵川工房	武蔵川工房 代表 武蔵川 剛嗣氏
2月1日(木)	高岡漆器 高岡銅器	高岡市役所	産業企画課 高橋氏 杉坂氏、秋元氏
2月2日(金)	五箇山和紙	五箇山和紙の里	道の駅事務局長 野原氏 和紙職人 石本 泉氏
2月4日(日)	高岡漆器	漆器くにもと	折橋 治樹氏 國本 耕太郎氏
2月5日(月)	井波彫刻	井波彫刻協同組合	井波彫刻協同組合 主事 亀田 依理子氏
2月9日(金)	高岡銅器	高岡銅器団地協同組合	中山 晃氏
2月9日(金)	高岡漆器 高岡銅器	高岡市デザイン・ 工芸センター	高岡市デザイン・工芸センター 日野 利氏
2月13日	庄川挽物木地	庄川特産館	庄川木工協同組合 理事長 但田 一彦氏
2月17日	井波彫刻	いなみ木彫りの里創遊館	井波木彫りの里創遊館 取締役 江尻 大朗氏
2月18～19日	先進地視察	輪島漆器産地 視察	まちづくり輪島 九内一也氏 塗太郎 中宮春男氏 工房和美紗美 立野敏昭氏 大崎漆器店 大崎四郎氏

(付録) 産地を元気にする 100 の提案

具体的提案一覧

【高岡漆器】

タイトル	概要
鮮やか螺鈿細工アクセサリー体験	アイドルやアニメなどのキャラクターには「イメージカラー・モチーフ」がある。アイドルやアニメが好きな女性向けに、一定数の色と形状の貝を用意し、自由に色を選択できる螺鈿細工アクセサリー制作体験を行う。
エンゲージ漆器・記念日漆器体験	パートナーと末永く使えるお椀などのなどの食器を作り、互いにプレゼントする。タイピンやブローチなど仕事でも使えるようなものを作る。記念日ごとに作りに来ると連れ添った年数を増すごとに体験料の割引が適用される。
高岡漆器の入れ子椀	新生活を迎える人向けに五脚一組でセット販売する。
うすはりガラス専用カップホルダー	水滴がつかないようにうすはりガラス専用のカップホルダーを開発する。
紙コップを高級品にする拭き漆カップホルダー	紙コップ専用の拭き漆カップホルダーの開発を行う。
拭きうるしワークショップ	紙コップを高級品に見せる実用的カップホルダーの拭き漆体験を行う。
漆かぶれカフェ	漆塗りの食器で、カシューナッツやマンゴーなどのウルシ科の食べ物や、漆コーヒー・漆ハチミツを使ったメニューを開発し、提供する。
漆ファッションショー	漆塗りの小物と漆染めの布を使った服のファッションショーを開催し、展示販売も行う。
漆ライブ	漆塗りのピック、ドラムスティックを使ったライブを開催する。
漆黒展	漆塗りの壁、床、天井に漆塗りの作品や家具を置いた漆黒の部屋を作り、展覧会を開催する。
伝統的工芸品道具ツアー	漆器の「筆」「炭」などを巡るツアーを企画実施する。
椀 day ツアー	普段使いする「お椀」をテーマに漆器や生地やなどの工房を見学・体験する日帰りツアー、あるいは内容が1日で完結するツアーの企画。
出産のデンサン	輪島で実施しているように、行政が出産祝いとして漆器（へその緒箱など）を贈る。
ハンドメイド螺鈿細工キット	UV レジンなどの塗料を使い漆塗り風・螺鈿細工風といったハンドメイド作品を作る人が増えている。そういったアクセサリーや小物作りが好きな人向けに、自分で作れる螺鈿細工キットを発売する。

螺鈿細工サンキャッチャー	インテリアとして使用できる、螺鈿を用いたサンキャッチャーを作る。
漆塗りがわかる鉛筆	漆塗りの工程が分かるように、それぞれの工程手順ごとの色（グラデーション）がかかった鉛筆を作る。
漆塗りコスメ	親から子へのプレゼントとして、漆塗りの化粧品ケースの開発を行う。
トリオセットづくり	箸・フォーク・スプーンのトリオセットを作る。可能であれば箸づくりのようにフォークやスプーンの持ち手に絵付けできる形にする。

【高岡銅器】

タイトル	概要
高岡銅器着色体験	銅器の着色の体験がないため、着色体験を開発する。
錫しい足湯（夏）	井戸水で冷たい足湯を行う。底を錫で作る。
工場を回って体験	工程ごとの工場や工房で体験し一つのものを完成させる。
表札づくりワークショップ	家の表札を銅器でつくる WS。引き出物づくりとセットでもよいのではないだろうか。
ビアクーラー	錫製のボックスを作り雪に埋めて使う。スキー場などで天然の冷蔵庫を作る。冷えたビールやチーズを食べることができる。
痛くないイヤリングづくり	錫の変形しやすい特質を利用して自分の耳にフィットするイヤリングを作る。錫は抗菌作用もあるためアクセサリーに向いている。

【庄川挽物木地】

タイトル	概要
庄川挽物木地の風呂桶づくり体験	庄川挽物木地の技術で風呂桶を作り（形は深めのサラダボウルを想定）、最後に道の駅庄川の焼き印を押して出来上がり。体験後は桶を持って実際に周辺の温泉を巡ってもらいと、入浴料の割引などの特典が付く。帰り際に温泉に桶を預け、職人がのちにウレタン塗装で仕上げしてから郵送する。
とやまのケロリン桶	ケロリン桶と庄川挽物木地のコラボ商品を作る。庄川挽物木地の技術でサラダボウルのような形の容器を作り、そこにケロリンマークを焼き入れた商品を開発する。販売場所は道の駅庄川、庄川水記念公園、新高岡駅の三ヶ所を予定する。
とやまのケロリン桶で温泉巡りキャンペーン	庄川挽物木地のケロリン桶を購入した人に庄川周辺の温泉施設スタンプラリーマップを渡し、三つ以上の温泉スタンプを押したマップを道の駅庄川か庄川水記念公園で提示すると、庄川の土産品である「ゆずまる」が一つ提供される。

庄川ひきもの留学	全国の工芸系学校からインターン生を募集する。高校は夏休みの8月中、大学や専門学校からは春休みの3月、夏休みの9月で募集。五日～一週間ほど滞在してもらって、庄川という地域を知り、そこで育まれた技術を知ってもらうことが目的。宿泊施設には、銭湯施設・ゆずの郷やまぶきの自由スペースを使わせてもらう。
庄川挽物木地デザインコンペ	全国の工芸系学校へ告知し知名度を上げる。グランプリは実際に商品化し、賞金は庄川観光ツアーに無料招待などを予定する。
コーヒーグッズセット	コーヒーカップ、ソーサー、豆をしまふキャニスター、計量スプーンなど毎月新しい木製のコーヒー関連グッズが送られ、半年ほどで全部揃う予定。
庄川挽物のサラダボウル	庄川挽物木地製のサラダボウルを買った人にクーポンを渡す。そのクーポンを砺波市の農産物直売所などで提示すれば、旬の野菜をプレゼント。
自分色に染め上げるお皿づくりキット	庄川挽物木地の白木地のケーキ皿とカシュウ、刷毛などの詰め合わせ二枚セットバージョンも作り、親子や恋人と、好きな色になるまで皿にカシュウを拭き漆の要領で塗ってもらう。
木製プランターカバー	伝統工芸×植物のある暮らしシリーズとして、桜の木でできたカバーには桜の苗木を植えるなど原材料と同じ苗木を植えるという新たな楽しみ方を提供。
木のある暮らし・キッチン編	白木の吸湿性を活かして、砂糖やスパイスなどの調味料入れを作る。嫁入り道具として、食器類とともにセット販売して売り出すことも考慮。
敬老の日専用カタログ	庄川挽物木地の原材料となる木には「長寿」を願うクワなど縁起の良いものが多い。それを利用し、両親の長寿を祈る伝統工芸品を敬老の日にプレゼントできるカタログを作る。
庄川ひきものタワーバトル・チャンピオンシップ	庄川挽物木地で作ったお風呂で遊べるおもちゃを使ったタワーバトルをさらに大規模化して、トーナメント形式の競技会を開催する。開催場所は銭湯施設・ゆずの郷やまぶきを予定する。

【五箇山和紙】

タイトル	概要
原料から作る和紙漉き体験	農作業の手伝いや塵取り、叩き解す工程など込みで紙すき体験を行う。対象は小学校高学年から大人まで。農作業であれば団体で受け入れて一度に体験することもできるうえに、人手が足りていない農作業を進めることもできる。原料から触れることでより和紙に親しみと興味を持ってもらう。
和紙でつくってみよう	現在市内に内職を頼んでいるとのことなので、それを体験にできないかと考えた。細かい手作業が好きな方に、内職仕事の手伝いに加え、出来上がった商品をプレゼント。自分で作った商品により愛着が湧く。会社の研修など団体で受け入れても良い。一緒に作業することで、親睦を深めるきっかけにもなる。

和紙紙塑人形模様入れ	出来上がった紙塑人形に顔や模様を入れるワークショップ。簡単にお気に入りの紙塑人形を作ることができるため、小さな子供から大人でも楽しむことができるのではないかな。
オリジナル名刺入れづくり～和紙×活版印刷～	現在和紙の名刺入れが販売されているが、それに活版印刷で名前やワンポイントを入れることのできるワークショップ。社会人にとって欠かせない名刺入れを自分で作ることでより愛着を持たせる。名刺入れを作るところからやっても良い。和紙は活版印刷と相性が良いことから活版印刷を取り入れることで体験や商品の幅も広がると考える。
和紙×活版印刷名刺作成ワークショップ	活版印刷で和紙の名刺をつくるワークショップ。
オリジナル文庫本カバー～和紙×活版印刷～	カフェ、書店や図書館などで出張ワークショップ。デジタル化が進むなかでも、紙の本を選ぶ人を対象とし、和紙への興味を引き出す。大まかな内容としては上記の名刺入れづくりと同じ。
フォトづくりワークショップ	伝統工芸を中心に富山県を観光した際の写真をフォトブックとしてまとめる。表紙やカバーを和紙とし、和綴じ製本まで行う。
張り子人形の絵付け体験	干支の張り子人形に絵付けをする。その年の干支や好きな動物に絵付けをしてもらう。
君のアイデアから新商品誕生！？	学生の学習プログラムとして紙漉き体験や工房見学をして終了するのではなく、そこからこれらの和紙を使って、どのような商品ができるか、どのような商品が欲しいかを考えるプログラム。なかなか思いつかないような斬新なアイデアが生まれることを期待。また、学生としても和紙について学び、実際に商品開発を体験することは貴重な体験になる。
和紙バッグワークショップ	五箇山和紙は他産地の和紙よりも丈夫であることから、丈夫で長持ちする和紙のバッグを作るワークショップ。
昔懐かしおもちゃ体験	めんこや紙風船、紙ずもうなど今ではあまり見られないような遊びを通じた学習として小学校低学年に実施。自分で作って、自分で遊ぶ。高齢者に向けて昔を思い出す遊びとしても実施しても良い。
おめん作り体験	和紙で自由にお面を作ってもらおう。
折り紙アクセサリー体験	小さな和紙で折り紙をし、アクセサリーにする体験。
名前入り絵本	出産祝いなどで記念に名前入りの絵本を作る。絵本の表紙、挿絵などを和紙で作る。
書きごたえ抜群お話し会	自分の手持ちの文具と和紙製品の相性を実際に試し書きしてみる企画。近年は文房具好きが多く、紙そのものへの関心も高いため、気に入っている筆記用具で試すことで購入にも繋がる。
あぶらとり紙のアクセ	富山県内のホテルや旅館などのアメニティに和紙のあぶらとり紙を設置する。

三事業所で連携・分業	楮の栽培などの農作業はどこかでまとめて行う。三つの事業所で同じことを行うのではなく、それぞれで「体験や工房見学」、「楮の栽培」、「商品販売、開発」などに分業する。
五箇山ぐらし	一定期間五箇山に泊まり、和紙づくりの体験（農作業、紙漉き、商品づくり、開発）をする。都市の喧騒から離れ、自然のなかで過ごしてみたい人、新たな感性を磨きたい人に。軽く五箇山に住むような感覚で五箇山の地自体に親しみをもってもらおう。その中で、和紙の原料から触れることで和紙に親しみをもつ。また、商品開発では、外からきたからこそこの視点など新鮮な考えを得ることができる。
和菓子を彩る和紙	和菓子を包む和紙を菓子職人が紙漉きをして作る。または、紙すき体験と合わせて、和紙職人と話し合いどんな和紙を作るかを相談。新たな商品開発にもつながる可能性。

【井波彫刻】

タイトル	概要
寺社でおまもり作り体験	瑞泉寺の参拝客向けに、寺社で願いをこめて木のお守りを作れる体験を行う。
親子で貯金箱作り	夏休みの自由研究に親子で貯金箱を作る。
お店の看板作りワークショップ	小学生や中学生を対象に、自由に自分が経営する店を設定してもらい、その店の木彫り看板制作をする。着色も可能ならできるようにする。
木のアクセサリ作り体験	木の好きな形に彫り、それをゴムやチェーンに通してヘアゴムやネックレスなどにする。
アニマルセロハンテープ台作りワークショップ	ゾウやハリネズミなどの形になる型を作り、型どおりに木の板をカットして組み立ててセロハンテープ台を制作するワークショップ。
かばん de スタンプラリー	観光客などに無地のトートバッグを用意し、職人の工房にそれぞれあるスタンプを好きなようにバッグに押しオリジナルトートバッグづくりをする。八日町通りには工房が立ち並び、外からでも窓ガラス越しに職人の仕事を自由に見学ができるようにはなっているものの、見るだけで終わってしまっている。実際に職人と交流できる場を設け、井波彫刻への理解や商品の購入に繋げる。
井波彫刻ショールーム	井波彫刻の技法で制作した家具や美術品で一つのショールームを作り、展示販売を行う。
ペットの似顔絵彫刻	ペットの写真を送ると、ペットにそっくりな彫刻の置物が届くシステムを作る。
端材サシェ	ヒノキの端材を袋に入れて、サシェにして再利用する。
ヒノキでリラックス	井波彫刻で木を削った際にでたヒノキの木くずは水を吹きかけると香り立ちリラクゼーション効果がある。ヒノキの効能を感じてもらおう。

旅のしおり	本の葉として使用できる木彫りを施した木製の葉。観光客向けの土産品にもなる。
工房まもり	工房ごとに木のおまもりを制作してもらい、工房で直接販売する。おまもりはそれぞれの特色を活かしたデザインにして、工房ごとにご利益が違って面白い。工房に直接足を運んでもらい、おまもりで各工房の特色を知ってもらう。

【産地間連携・5品目全種】

タイトル	概要
ウォッチウォッチ	五つの伝統的工芸品の「時計」の展示と時計制作のワークショップの開催。
孫に伝えたい日本の心	高齢者を対象に、孫のために伝統的工芸品のワークショップを実施。
祖父母に伝えたい子どもの気持ち	敬老の日近くにワークショップを実施。できたものを孫（や子ども）が祖父母（や親）に感謝の気持ちとして作ったものをプレゼントする風習を確立させる。
伝統的工芸品ぐい飲みセット	庄川挽物木地と井波彫刻、庄川挽物木地と高岡漆器、高岡銅器などの四つの同じ形のぐい飲みを制作し、和紙で包むまたは和紙の箱で包装した呉西伝統的工芸品セットの販売。銅器や漆器の片口を入れるセットも作る。形や色、模様などを選択できる形にする。
ぐい飲み&ぐい飲みケースづくり	井波彫刻か庄川挽物木地などで、ぐい飲みの収容できるケース作りを行う。また、収納するぐい飲みづくりも定期的に開催する。
手作り卒業証書・ケース	和紙の卒業証書や漆塗りの卒業証書ケースなど。卒業証書は必ずもらうものだがあまり思い入れがないので、授業などで手作りすることで体験の機会を作ると共に思い入れのあるものにする。
伝統的工芸品原材料ツアー	漆器の「うるし」、和紙の「楮」などをみる。あるいは植えたり育てたりする体験を実施。
浴衣観光	浴衣で高岡市を観光する。浴衣の柄や色に合わせてイヤリングや帯どめを作る体験をする。螺鈿ネイルなどを合わせても良い。
成人式前撮り	山町筋や金屋町で成人式の前撮りを行い、漆器や銅器のアクセサリーなどの貸し出し、販売を行う。
とやまふくふくぶくろ	和紙のポーチに高岡漆器の手鏡や高岡銅器のアクセサリーなどを詰めたお楽しみバッグとして販売する。何段階か値段設定を変え、高価なものには銅器のぐい呑みや漆器の食器、庄川挽物生地 of 食器などが入っている。
とやまふるさとボックス	「ふるさとボックス」とは遠方に住む友人同士が、それぞれ自分の土地のものを段ボール一箱分に詰めてお互いに贈り合うというシステム。中身は食材から工芸品など多様多種であり、地元のPRをしつつ友人との交流を図る。

和紙製品との共通デザイン漆器	和紙商品などで使われている「とやまもよう」のような富山特有の模様を漆器でも再現する。
呉西地区伝統的工芸品モデルルームづくり	呉西地区の伝統的工芸品のコラボレーションでテーブルコーディネートを実施。
呉西ランチBOXセット	観光客向けの土産品、またはギフト品として制作する。高岡銅器や庄川挽物木地の弁当箱、高岡漆器の箸、井波彫刻のスプーン、和紙のランチヨンマットなど。
伝統工芸ラッピング	伝統工芸品それぞれでギフトを包む箱やパッケージを制作する。お歳暮やお中元など、冠婚葬祭の際の高価な贈り物用に受注生産する。
照明家具	井波彫刻と和紙、高岡漆器と和紙などで一つの照明家具を作る。
伝統工芸缶バッチ	技法や工程ごとに一つ缶バッチを作り、それぞれの技法の違いなどをわかりやすく目で見て分かる形にし、伝統工芸の技法への理解を促す。
メイクパレット	アイシャドウや口紅をオリジナルで組み合わせるパレット。抗菌作用のある錫や漆器で制作する。
エンゲージリングケース	伝統産業の技法を使った指輪のケースを制作する。
ハレの日向け伝統工芸品コーデ	アクセサリ（漆・銅・和紙など）やネイル（漆）など、振袖やドレスに合う商品・デザインの提案を行う。

【伝統工芸品全体】

実施タイトル	概要
作ってのむぐい呑み体験	工芸品のジャンルを問わず、ぐい呑み作りの体験をし、作ったぐい呑みを持参して店舗でお酒を飲めるサービス。
お正月関連商品セット	正月用品をセットにして販売。おめでたい「正月」を伝統工芸品で彩る企画。重箱・お椀などの食器から、干支の彫刻、お年玉を入れるポチ袋、書初めの用紙など。
二十歳のデンサン	成人祝いに伝統工芸品を贈る。
結婚準備プロジェクト	結婚を控えたカップル向け。新婚に必要なお椀、箸、汁椀、箸置きを作るワークショップの開催、またはそれらをセット販売する。引き出物づくりや表札づくり体験と兼ねて行っても良い。結婚予定、新婚向けのカatalog制作をする。
結婚式の引き出物づくり	結婚式の引き出物づくりを行うワークショップ。制作プロセスを映像にし、編集を行い、結婚式に流せるようにする。
伝産合コン	体験と婚活を合わせて実施。対一、又はグループで制作する。制作のプロセスで交流を図り、作ったもの（ぐいのみ、お椀）を使って食事を楽しむ。

婚活イベント参加券つき体験	体験を行った人を対象として、婚活イベントに参加できる権利を付与する。そして新たに体験を行うときは男女ペアまたはグループで行う。
利き食器	様々な伝統工芸の技法を用いた食器を実際に使用し、使い心地を比べることで、プラスチックなど普段使っているものとの違いやそれぞれの良さを知る。
伝統産業仮面舞踏会	伝統工芸の技法を使って自分で作った仮面を用いた合コンまたは婚活パーティーを開催する。伝統工芸に関心のある人や職人との交流を図る。
RPG 風伝統産業めぐりマップ	職人がゲームのキャラクターのように書かれている RPG 風の地図を制作し、それを元に伝統産業巡りを行う。様々な工房で見学、体験などを行い、アイテムとして工芸品を集め、経験値をためてレベルアップすると特典が付く仕組みを作る。
伝統工芸ハンドスピナー	伝統工芸の技法を用いてハンドスピナーを制作する。ハンドスピナーは一時期社会問題になるほど大流行しており、海外でも人気があるので外国人観光客やマニア、または子供向けに制作する。
いろどりみどりセット	色という括りでの商品セットを行う。
ありがとうのご縁セット	大切な人へのプレゼント・お礼に伝統工芸品を贈ろうという提案。縁＝円とし、食器・雑貨などの丸い商品を中心にセレクト。

分 担

岩崎 円花	(1-5, 3-5, 付録, 全体とりまとめ)
木下 彩	(1-1, 2-2-3, 2-3, 3-1)
上坂 真由	(1-2, 1-6, 2-2-2, 2-6, 3-2)
福間 百花	(1-4, 3-4, 4)
山本 鮎里	(1-3, 2-1, 2-2-1, 3-3)
阿部 祐香	(付録)
山本 美咲	(付録)
安嶋 是晴	(はじめに, おわりに, 全体編集)

呉西地区における伝統的工芸品に関する調査報告書 —富山型ニューツーリズムに向けた提案—

2018年3月31日発行

(発 行) 富山大学 芸術文化学部 文化政策論ゼミ
(指導・協力) 株式会社はんぶんこ 東海裕慎
(編 著) 富山大学芸術文化学部 安嶋是晴
(連絡先) 〒933-8588 高岡市二上町180
yasujima@tad.u-toyama.ac.jp
(印 刷) ソノダ印刷株式会社
〒921-8161 金沢市有松4丁目3番26号
